



香川大学医学部DRI先端医学研究棟新設及び実習棟改修に伴う竣工記念式典が開催されました。

讃 樹 會

令和7年9月1日発行

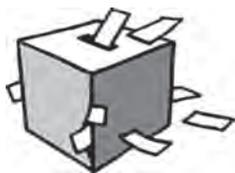
CONTENTS

- 02 会長選挙・理事選挙告示
- 03 理事候補推薦用紙／役員一覧
- 05 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會の皆様へ
- 06 同窓生教授就任挨拶
- 12 退任挨拶
- 15 新任教授就任挨拶
- 18 令和7年度研究助成金／研究奨励金 選考結果
- 19 令和6年度会計報告
- 20 令和7年度予算
- 21 会費納入状況報告
- 22 理事会議事録
- 24 ニュースの窓
- 28 【特集】インタビュー〈ベスト指導医〉
- 32 支部会・懇親会
 - ▶11期生 ▶関西支部会
 - 関東支部会開催のお知らせ
- 37 教室便り
- 45 編集後記／事務局からのお知らせ

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX 087-840-2291
E-mail sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 星川 広史
編集人 谷 文二
印刷所 株式会社





令和8年・令和9年度同窓会会長及び理事 選挙告示

選挙管理委員会 委員長 河井 信行

同窓会会長選挙

会則第3章 第9条、第10条、並びに同窓会選挙規定第5条の定めるところに基づき、香川大学医学部医学科同窓会讃樹會会長選挙を告示します。

立候補届け出締め切りは令和7年12月19日とします。

会則 第3章 役員

第9条 本会の役員は次の各項によって規定される。

- 1 役員は任期は2年で満了とする。但し再選は妨げられない。
- 2 役員は任期が満了した場合においても、後任者が選任されるまでは、その職務を行わなければならない。
- 3 役員に欠員が生じた場合は、その役員の選出母体から役員を選出し、残りの任期を勤める。

第10条 会長公選は2年に一度行わなければならない。

- 1 本会会長は、正会員による直接選挙で選出される。
- 2 会長選挙は、別に定める同窓会選挙規定に基づき、公平且つ開示して行わなければならない。

同窓会選挙規定

第5条 会長選挙立候補者の所信表明開示

- 1 会長選挙立候補者は、所信表明を会報において正会員に開示しなければならない。
- 2 会長選挙立候補者は、正会員の中から少なくとも5名の推薦人氏名を公開しなければならない。

同窓会理事選挙

会則第3章 第9条、並びに会則第5章 第25条に基づき、理事選挙を告示します。つきましては、各卒年同窓の推薦を令和7年11月28日までをお願いします。

会則 第5章 役員および会議の役割

第25条 理事選出は、各卒年同窓の推薦にて理事候補となり、会員の有効投票数の過半数を得て、信任と承認されたものが理事となる。

◆理事選挙の流れ◆

① 【理事候補の推薦】

9月号会報で、理事候補推薦用紙をお送りします。(次ページに中綴じされていますので切り離してご使用下さい。)同期で適任と思われる方の名前を、自薦他薦問わず最多で4名まで記入し11月28日までに返送してください。返送方法は同封の返信用封筒利用、FAX、メールのいずれでも結構です。

② 【理事信任投票】

推薦が出揃いましたら、理事候補一覧を作成し、翌年の2月にお手元にお送りしますので、信任・不信任を記入の上、返送ください。

◆◆ 会長選挙及び理事選挙 タイムスケジュール ◆◆

2025年9月	10月	11月	12月	2026年1月	2月	3月	4月	総会開催月
告示		理事推薦・立候補 返信締切 (11月28日)	会長立候補 締切 (12月19日)		会長選挙 理事選挙	投票		投票締切

会則及び同窓会選挙規定、今期の執行部並びに理事役員名につきましては、讃樹會HPにも掲載されています。

<https://dousokai.site/sanjukai/>

讃樹會理事選挙

令和8年・9年度理事候補推薦用紙

現在の理事は、令和8年（2026年）3月に任期満了となりますので、会則9条及び会則25条にもとづき選挙を施行します。つきましては、各卒年同窓の理事候補推薦をお願いします。

理事選挙に際しては、現在の理事、執行部役員を含む全ての方を対象にご推薦下さい。但し、特別役員（母校教授就任者）は除きます。現在の理事及び執行部役員、特別役員（母校教授就任者）は裏面を参照下さい

正会員（貴方と同じ卒年）の中から適任と思われる理事候補を推薦して下さい。（4名以内）

()

()

()

()

令和7年 月 日

名前

卒年 S・H・R・院修了

記入の上、返信用封筒で返送下さい。FAX、メールでも結構です。

【締切2025年11月28日必着】

問合せ先：讃樹會事務局

TEL/FAX 087-840-2291

E-mail sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp

次年度理事候補推薦のための参考資料

現行年度（令和6年4月～令和8年3月）の役員一覧

会長 副会長 顧問

役職	氏名	卒年	役職	氏名	卒年
会長	星川 広史	H2	顧問(名誉会長)	濱本龍七郎	S61
副会長	大森 浩二	S61	顧問	平川栄一郎	S61
副会長	安岐 康晴	院H3	顧問	高橋 則尋	S61
副会長	中村 丈洋	H7	顧問	佐藤 清人	H元
副会長	星川 洋一	H7			

執行部スタッフ

役職	氏名	卒年	役職	氏名	卒年
事業局長	三木 崇範	H3	教育研修支援局長	安田 真之	H9
広報局長	谷 丈二	H14	副局長	松原 あい	H9
副局長	泉川 美晴	H13	副局長	福岡奈津子	H20
局員	近藤 彰宏	H22	事務局長(兼任)	安田 真之	H9
学術局長	西内 崇将	H12	副事務局長	大島 稔	H16
副局長	田岡利宜也	H13			

特別役員（※母校出身母校教授） 就任年順

	氏名	所属	卒年	氏名	所属	卒年
代表	西山 成	薬理学	H5	小坂 信二	薬剤学	院H25
	西山 佳宏	放射線医学	H2	三宅 啓介	脳神経外科学	H5
	横井 英人	医療情報学	H8	横平 政直	医学教育学	H11
	村尾 孝児	内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学	H2	岡野 圭一	消化器外科学	H4
	日下 隆	小児科学	H3	門田 球一	分子腫瘍病理学	H15
	三木 崇範	神経機能形態学	H3	市来 智子	総合診療学	H9
	星川 広史	耳鼻咽喉科学	H2	小原 英幹	消化器・神経内科学	H9
	三宅 実	歯科口腔外科学	院H3	岩部 美紀	生化学	院H16
	杉元 幹史	泌尿器科学	S63	河北 賢哉	救急災害医学	H6
	金西 賢治	周産期学婦人科学	H5			

理事

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
S61年	植村 信久	H6年	加地 良雄	H16年	中村 信嗣	H27年	磯崎 竜一
S61年	大西 宏明	H7年	井町 仁美	H17年	今井 秀記	H28年	秋光純一郎
S62年	河井 信行	H7年	高尾 努	H18年	須藤 広誠	H29年	戸田 雄太
S62年	川上 公宏	H8年	野間 貴久	H18年	村上あきつ	H30年	石田 智也
S63年	田中 宏和	H8年	村田 晶子	H19年	山口幸之助	H31年	今上 雅史
S63年	吉村 裕	H9年	花岡有為子	H20年	中野 裕貴	H31年	品部 佑太
H元年	合田真由美	H10年	石川かおり	H20年	細川洋一郎	R2年	宮本貴和子
H元年	篠原 豊彦	H10年	岡内 正信	H21年	石橋 洋一	R3年	岡野 滉司
H2年	羽場 礼次	H11年	小林 三善	H22年	阪部 雅章	R3年	飛梅 里佳
H2年	吉田 智子	H12年	三崎 伯幸	H23年	井上 卓哉	R4年	梶 明日香
H3年	高木雄一郎	H13年	西庄 佐恵	H23年	千田 鉄平	R4年	四元 拓宏
H4年	佐用 義孝	H14年	小西 行彦	H24年	大西 啓右	R5年	東 和輝
H4年	山口 真弘	H15年	玉井 求宜	H25年	内田 俊平	院H8	小川 尊明
H5年	岩瀬 孝志	H15年	松浦奈都美	H26年	小塚 和博		
H5年	川崎浩二郎	H16年	小谷野耕佑	H27年	和泉 高宏		

香川大学医学部医学科同窓会・讃樹會の皆様へ

日頃より母校の発展と後進の育成に温かなご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。本学は香川医科大学として開学以来、まもなく創設50周年という大きな節目を迎えますが、この半世紀を支えてくださいました全国・世界で活躍される卒業生の皆様に対し、この場をお借りいたしまして、厚く御礼申し上げます。

さて、昨今、医学と医療を取り巻く環境は急速に変化し、これまで以上に高度な教育・研究環境が求められています。一方で、子供数が半分になった今、地方大学医学部も半分で良いのではないかという声も強くなってきております。そのような社会状況の中で私たちは生き残りをかけ、この50周年を次の50年に向けた出発点とするべく「医学部キャンパス再開発」に踏み出しております。しかしながら、広く報道されております通り、旧国立大学医学部は非常に厳しい経営状況にあり、十分に整備できていないのが現状であります。

そこで、この難局を乗り切るため、「香川大学医学部50周年記念基金」を創設させていただき、皆様よりご寄付をお願いしております。さらに、本年4月からは三木町のご協力もいただき、「ふるさと納税制度」を活用し、税制優遇を受けながら直接母校を支援いただけるシステムも構築させていただきました（詳細は、それぞれ以下のリンク・QRコードとなります）。

香川大学医学部50周年記念特定基金

<https://www.med.kagawa-u.ac.jp/~redevelop/index.html>



香川大学医学部・附属病院 ふるさと納税

<https://www.med.kagawa-u.ac.jp/~furusato/>



多くの卒業生の皆様方よりいただきましたご寄附は、大切に学生の教育や国際交流に関連する活動に使用させていただいております。この場をお借りして、御礼申し上げる次第でございますが、その感謝を込め、今年も「ホームカミング・デイ2025」を開催いたします。

卒業生の皆さまや現役学生の関係者の方々を母校にお迎えし、特別な一日をお届けしたいと考えております。大学祭と合わせて2025年10月12日（日）14：00～16：00（予定）に開催されますが、翌日の10月13日（月）は祝日ですので、懐かしい思い出に触れると同時に、現在の医学部の様子や学生たちの活動にも触れていただければ幸いです。医学部の近況報告や特別講演、在学生による発表など、盛りだくさんのプログラムをご用意しております。また、讃樹會との共催で夜の集まりも企画しております。詳細はこちらのページをご覧ください、ぜひともご参加をご検討いただければ幸いです。

<https://www.med.kagawa-u.ac.jp/~homecoming2025/>



改修中の研究棟（左）

50周年は母校と卒業生が手を携えて次の50年を創る機会であると考えます。どうか、この歴史的な節目に、在校生や教職員とともに、母校の輝かしい未来を築く仲間としてのお力添えをいただけますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

香川大学 医学部長
西山 成

同窓生教授就任挨拶

教授就任にあたって

子どもの脳を守るからこころを育むへ

香川大学医学部讃樹會の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。2024年3月に大阪大学大学院連合小児発達学研究所教授を拝命しました下野（旧姓 鍵谷）九理子と申します。学生時代は剣道部と管弦楽団に入り、部活動や同級生との遊びを通じて実に充実した（勉強以外で）6年間の香川生活を送らせていただきました。西医体、医科学生オーケストラ、旅行などと私の夏休みは実家に帰らずに色々飛び回っていたのはあの頃しかできないことだったなあと懐かしく思います。この度このような機会をいただきましたことは本当に光栄に思い感謝しております。

私は香川医科大学医学部を1993年（平成5年）に卒業後、大阪大学小児科にて小児科研修を行い、神経疾患をサブスペシャリティーに選びました。さらに遺伝性脱髄疾患の基礎研究で博士号を取得し、米国ノースカロライナ大学に留学し神経病理を学びました。帰国後は神経疾患の臨床と認知発達の研究、さらに発達障害の認知発達を重点に研究・教育を行ってきております。この連合小児発達学研究所は5大学の部門から成り立つ「子どものこころの発達を研究する」文理融合のユニークな大学院です。小児神経分野におきましては様々な神経疾患から“いかに子どもたちの脳を守るか？”ということとの戦いでありました。一方、連合小児発達学研究所で発達障害に関わるようになりましてからは、“どうやって子どもたちのこころを健全に育むか”ということを考えながら日々奮闘しております。

特にてんかんにつきましては、てんかんセンターを立ち上げ、脳外科と一緒に小児の難治てんかんに対する外科的治療を行い、片側の大脳半球の広範な異常であっても乳児期早期に手術をするとてんかん予後も発達面の改善は著しいことを経験してきました。また、頸部迷走神経を刺激するデバイスを胸に留置する手術を脳外科で行い、小児科でデバイスの調節をして脳内へのペーシング刺激を強化し、発作の頻度や強さを

大阪大学大学院連合小児発達学研究所

教授 下野（旧姓：鍵谷）九理子
（平成5年卒・8期生）

軽減させています。研究面では神経炎症細胞のミクログリアに取り込まれる放射性リガンドTSPO-PETを行い、てんかんの焦点部位で集積が増加していることや、手術標本でミクログリアの集積を確認しました。またTSPO-PETは他の画像検査よりも感度・特異度ともに優位性があり、発作コントロール群よりも難治性群で神経炎症の広がりや、免疫抑制治療している群では低下しており、治療効果が判定できることや、神経炎症の広がりや認知機能障害と関連していることを発表しました。

また、脳活動を計測する脳波・脳磁図を用いた研究として、予後良性とされる自然終息性小児てんかんの患者さんに聴覚性言語の認知タスクを行い、脳の活動を計測しますとてんかん性放電の頻度と関連してウェルニッケ野脳活動が低下しており、認知発達に影響を与えているということを示しました。

発達障害（神経発達症）の原因は遺伝子・早産・両親の高齢出産・体外受精・近年の短時間睡眠や乳児期からのメディア使用などの生活環境の変化など多因子にわたっており増加が問題となっています。特に自閉スペクトラム症（ASD）では感覚異常を持つ人が多く、思考や攻撃的行動などの問題行動と関連していること



研究所の教員・大学院生と一緒に。（筆者 前列左から5人目）

や、“感覚異常”を脳磁図で客観的に評価できること、神経の興奮系と抑制系のバランスの異常や注意や感情を司るネットワークとの機能連結の異常などが病態であると発表してきました。神経発達症の簡便なバイオマーカーの探索として脳磁図や脳波のデータを用いて深層学習の診断試みも行っています。また、脳MRI解析にてASD児の言語機能と画像の特徴や早産児で出生した3歳児の発達特性とMRIの特徴、協調運動発達とMRI画像の研究などを行っています。

今後は研究のみでなく、発達障害領域における社会への貢献についても積極的に行いたいと考えています。産学・医工連携により新たな診断と創薬を目指すこと、さらに地域連携を強化すること、小児から成人までの一貫性のある多職種チーム医療を行うことです。国内およびアジアの大学との連携も育ってきており、臨床データや小児の脳MRIデータが大規模なデータベースになってきています。今後こういった大きなデータバンクを活用して小児の脳科学研究の拠点としていきたいと考えております（もしご興味のある先生がいらっしゃいましたら、是非ご連絡ください）。

地域との連携におきましては大阪府下の3つの自治体と共同研究事業を行っています。発達障害への対応は医療のみならず、福祉、教育との連携が不可欠です。

讃樹會の先生方、香川大学医学部の後輩達とは今後とも是非末長くお付き合いいただければこんなに心強いことはありません。よろしくお願いたします。

略歴

平成5年3月 香川医科大学医学部卒業
 平成5年4月 大阪大学医学部小児科入局
 平成5年5月 箕面市立病院小児科
 平成9年5月 愛染橋病院小児科
 平成14年5月 大阪大学医学部医学博士号取得
 平成16年5月 米国ノースカロライナ大学医学部病理学
 平成17年5月 大阪大学医学部小児科助教
 平成22年4月 大阪大学連合小児発達学研究科助教
 平成24年4月 大阪大学連合小児発達学研究科講師
 平成30年8月 大阪大学連合小児発達学研究科准教授
 令和6年3月 大阪大学連合小児発達学研究科教授

就任にあたって

この度、香川大学医学部に新設されました地域医療総合医学講座の特任教授に、2024年10月より就任いたしました谷丈二と申します。平成14年に香川医科大学（現香川大学医学部）を卒業後、一貫して香川県の医療に携わってまいりました。消化器内科を専門とし、特に肝炎・肝臓の診断と治療を中心に診療・研究を行ってきましたが、同窓会誌の編集後記のほうの皆様もご存知かもしれません。

学位取得後は、消化器・神経内科の診療経験に加え、坂出市立病院やJA厚生連屋島総合病院での勤務を通じて、香川県の地域医療が抱える現状と課題について深く学ばせていただきました。また、香川大学医学部附属病院卒後臨床研修センター副センター長、超音波センター副センター長を務め、日本内科学会、日本消化器病学会、日本肝臓学会などの専門医・指導医として、後進の指導にも尽力してまいりました。

この度、これまでの臨床、教育、研究の経験を活か

し、香川県の地域医療の発展に貢献する機会をいただきましたこと、大変光栄に存じております。

・香川県における地域医療の現状と課題

厚生労働省が公表した医師偏在指標によりますと、香川県の指標値は266.9で全国平均を上回り、一見すると医師多数県に位置付けられています。しかしながら、県内の二次医療圏ごとの医師偏在指標を見ると、東部保健医療圏が306.8と上位にある一方で、小豆保健医療圏は109.0と下位に、西部保健医療圏は217.0と中位に位置しており、地域ごとの医師偏在が顕著です。

また、診療科別の人口10万人当たりの医師数においても、産婦人科や救急科などで全国平均を下回っており、診療科の偏在も大きな課題として認識しております。このように、香川県内において医師の地域偏在や診療科偏在という重要な課題が存在しており、その解決に向けた体系的な取り組みが不可欠です。



香川大学医学部 地域医療総合医学講座

特任教授 谷 丈二
 (平成14年卒・17期生)

・地域医療総合医学講座の取り組み

本講座は、こうした課題に対応するため、以下の取り組みを実施してまいります。

地域枠学生・地域枠医師への教育支援の強化：地域医療を担う意識を持った医師の育成を目指し、キャリア形成支援やメンタルサポート、地域医療従事への意識付け、継続的な医師養成プログラムの実施、特定診療科への誘導強化を行います。

医師不足地域への医師配置調整：地域枠医師からの配置希望聴取と適切なマッチング、指定医療機関22施設との緊密な連携、医師不足地域における医療ニーズの把握と対応を進めます。

総合診療医の育成・確保：高齢化が進む地域での総合診療医ニーズへの対応、総合診療医の育成プログラムの実施、地域包括ケアシステムとの連携強化を図ります。

研究活動の推進：地域医療における医師偏在解消に関する研究、診療科偏在の解消に向けた効果的な施策の研究、地域特性に応じた医療提供体制の研究、医師のキャリア形成と地域医療の両立に関する研究を推進します。

・讃樹會の皆様との連携

本講座の取り組みを確実に進めていくためには、讃樹會の皆様との緊密な連携が不可欠です。地域医療の最前線でご活躍の先生方のご知見やご経験は、私たちの教育・研究活動にとって極めて重要な羅針盤となることと確信しております。

特に、地域医療が直面している様々な課題について、皆様と共に検討し、実践的な解決策を見出していきたいと考えております。また、若手医師の教育・研修においては、地域の医療機関での実地研修や症例検討会など、先生方のご協力をいただきながら、より実践的な教育プログラムを展開してまいりたいと存じます。

さらに、地域医療体制の整備については、現場のニーズに即した体制づくりを進め、特に喫緊の課題である医師の地域偏在の解消については、地域の実情を熟知されている讃樹會の先生方のご意見を伺いながら、具体的な対策を講じてまいります。同時に、診療科偏在の解消に向けても、讃樹會の皆様と連携しながら、若手医師の専門医研修の充実や診療科選択への適切な支援など、実効性のある取り組みを推進してまいりたいと考えております。

・本講座が目指す未来

本講座の活動を通じて、まず第一に地域医療に対する使命感と高い意識を持った医師の育成が実現できるものと考えております。これにより、医師不足地域における医療提供体制の改善が進み、地域間での医療格差の解消につながることを期待されます。また、現在課題となっている特定診療科における医師確保についても、計画的な教育・支援体制の構築により、その促進が図られるものと確信しております。

さらに、地域の医療機関との密接な連携と若手医師への継続的な教育支援により、香川県全体の地域医療の質が向上していくことが期待されます。そして最終的には、これらの取り組みを通じて、高齢化が進む香川県において、将来にわたって持続可能な地域医療体制を確立できるものと考えております。

このような効果の実現に向けて、全力で取り組んでまいり所存です。私はこれまでの臨床経験、教育経験、そして研究活動で得た知見を最大限に活用し、香川県の地域医療の充実と発展に貢献してまいり所存です。讃樹會の皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、讃樹會の皆様のみますますのご発展とご活躍を祈念いたしております。

略歴

平成14年3月	香川医科大学医学部医学科	卒業
平成14年4月	香川医科大学医学部附属病院	医員
平成15年9月	坂出市立病院	医員
平成22年4月	香川大学医学部附属病院	内視鏡診療部 病院助教
平成24年4月	香川大学医学部	消化器内科学 助教
平成25年4月	香川大学医学部	消化器・神経内科 助教
平成26年3月	香川大学大学院医学系研究科	修了
平成26年4月	香川大学医学部	消化器・神経内科 助教（学内講師）
平成29年3月	香川大学医学部	消化器・神経内科 退職
平成29年4月	JA厚生連 屋島総合病院	内科部長
平成31年4月	香川大学医学部	消化器・神経内科 学内講師
令和3年4月	香川大学医学部附属病院	卒後臨床研修センター副センター長（併任）
令和5年4月	香川大学医学部附属病院	超音波センター副センター長（併任）
令和6年4月	香川大学医学部附属病院	消化器内科 講師
令和6年10月	香川大学医学部	地域医療総合医学講座 特任教授
		現在に至る

「教授就任にあたって」



香川大学医学部附属病院 救命救急センター
香川大学医学部 救急災害医学

教授 河北 賢哉
(平成6年卒・9期生)

令和7年4月より香川大学医学部救急災害医学教授および附属病院救命救急センター長を拝命いたしました。はじめに、讃樹會の先生方には、平素より温かいご支援・ご指導を賜り、誠にありがとうございます。この場をお借りし、御礼申し上げます。

私は香川県高松市出身で昭和63年4月に香川医科大学へ入学しました。学生時代はバレーボール部に所属し、部活とバイトに明け暮れた日々でした。今もその頃一緒に過ごした仲間やチームメイトとは交流があり、たまに会うと昔話に花が咲き楽しい時間を過ごすことができます。なんとか平成6年に香川医科大学を卒業し、医師国家試験にも合格することができました。当時から県外に出て働くといった発想は全くなく、脳神経外科教室（長尾省吾教授）へ入局しました。その後10年間、県内の医療機関で脳神経外科医として診療に従事し、平成16年に香川大学医学部附属病院へ戻ってきました。その際、救命救急センターへ配属されたことがきっかけで救急医の道を歩み始めました。幸いそれまでの期間、脳神経外科医として救急医療に携わってきたので、私自身の診療スタイルを変えることなく救急医へシフトできました。ただし、対象疾患があらゆる外傷、あらゆる内因性疾患に広がったため、学ぶべきことや、獲得しなければならない手技が増えました。忙しくも新たな知識や習得した手技が増えてくるとそれが楽しさ、やりがいにつながり、救急医を続けることができました。石の上にも3年ではないですが、20年間救命救急センターで診療や臨床研究を続けていると、私と一緒に苦楽を共にしてくれる後輩たちが集ってくれました。彼ら彼女たちや香川県内で救急医を志す若人が憂いなく救急医を続けられるために、香川県の救急医療体制をより良いものにしなければならないと強く感じるようになり、今日に至りました。

我々の教室のルーツは、昭和58年に小栗顕二教授が開講された麻酔・救急医学講座に遡ります。この時代は、救急医、麻酔科医、集中治療医がそれぞれの領域を超えて救急外来、手術室、集中治療室を行き来しながら多種多様な診療が行われていました。平成12年に前川信博教授が就任され、翌年には附属病院に救命救急センターが設置されました。平成16年に黒田泰弘先

生と私が救命救急センターに赴任し、この頃から救急医は救命救急センター、麻酔科医は手術室が活躍する舞台へと少しずつ変化していきました。その後、あらゆる診療科にあてはまる細分化の流れに乗り、平成20年に麻酔救急医学講座が救急災害医学講座と麻酔学講座に再編されました。翌年の平成21年に黒田泰弘教授が救急災害医学講座の初代教授に就任され、ここから我々の教室が本格的にスタートしました。心停止後症候群を中心とした重症脳障害患者に対する神経集中治療を展開しながら、3次救急医療を実践してきました。その間に、平成23年の東日本大震災、平成30年の西日本豪雨、令和6年の能登半島地震に対し、DMATを派遣し、災害支援活動を行いました。そして令和7年4月に黒田教授から私へ教室運営がバトンタッチされました。

今、全国的に救急搬送件数の増加に伴い、救急車の現場滞在時間や搬送困難事案が増加しています。香川県も例外ではなく令和4年から搬送困難事案が急増しており、香川の救急医療は逼迫していると言えます。救急医療を必要とする傷病者に適切な医療を提供するために、香川県MC（メディカルコントロール）協議会で協議を重ね、令和7年度、香川県の事業として初期救急医療体制強化および救急医療機関連携体制構築事業が実施されます。この事業は、軽症・中等症の救急患者を一次医療機関に担ってもらい、二次・三次医療機関は一次医療機関をしっかりと支えていく体制を構築することが目的であります。オール香川で救急医療を護っていくことが求められています。我々救命救急センターは救急医療の“最後の砦”として、各医療機関や消防機関に対して安心・安全な存在であり、信頼していただける“最後の砦”でなければならないと強く感じています。そのためには救急医の育成が喫緊の課題です。まだ救急災害医学教室としては小さく、少数精鋭での診療、教育、研究が始まったばかりです。救急医を志す医学生は思いのほか多く、香川での救急医療を行う魅力を存分に伝え、教室を大きくしていきます。今後の進路に迷っている香川大学出身の救急医の先生方にはこの場をお借りしてお伝えしたいと思います。「我々と共に成長し、香川大学救急のsecond

stageを一緒に創りませんか。扉を大きく開き待っています。」

今後、救急医療だけではなく、香川県立中央病院と連携した香川県ドクターヘリ事業、病院前救急医療体制、大規模災害対策においても県や各医療機関、消防機関と連携し、より良い救急医療・災害医療体制を構築し、香川の未来を護っていきます。

讃樹會の先生方におかれましては、今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

略歴

平成6年3月 香川医科大学医学部医学科 卒業
 平成6年5月 香川医科大学 研修医（脳神経外科）
 平成7年1月 滝宮総合病院 医員（脳神経外科）
 平成10年1月 大川総合病院 医員（脳神経外科）
 平成10年4月 滝宮総合病院 医員（脳神経外科）
 平成10年10月 三豊総合病院 医員（脳神経外科）
 平成11年10月 香川医科大学医学部 医員（脳神経外科）
 平成12年9月 羽崎病院 医師（脳神経外科）
 平成14年4月 社会保険栗林病院 医員（脳神経外科）
 平成16年4月 香川大学医学部附属病院救命救急センター 医員
 平成19年11月 香川大学医学部附属病院救命救急センター 助教
 平成24年4月 香川大学医学部附属病院救命救急センター 講師
 平成28年5月 香川大学医学部附属病院救命救急センター 准教授
 （平成23年4月～香川大学医学部附属病院救命救急センター 副センター長）
 令和7年4月 香川大学医学部救急災害医学講座 教授
 （香川大学医学部附属病院救命救急センター センター長）

「教授就任にあたって」

変化を恐れず、無駄を恐れず

昭和医科大学医学部 集中治療医学講座

主任教授 阿部 智一
 （平成16年卒・19期生）



このたび、2025年4月より昭和医科大学医学部 集中治療医学講座の主任教授を拝命し、教室を主宰することとなりました。45床のICUに加え、アジア初・最大規模となる112床の“遠隔集中治療”の管理も担うこととなり、まさに大きな挑戦の真ただ中におります。現在の医療界は、人手不足や財政的制約といった多くの課題を抱えています。私は“ジェネラルマインド”を大切にしつつ、最新のテクノロジーと知識・技術を融合させることで、少しでもその解決に貢献したいと考えております。

私はこれまで、“Right Care, Right Now”をスローガンに掲げ、根拠に基づき、適切なタイミングで、適切な患者さんに、適切な方法で医療を提供することを目指してきました。そして、そうした医療が最終的に「人の幸せな生活」につながることを信じて、診療に取り組んできました。

尊敬するメンターから、「Physicianとは、Clinicianであり、Educatorであり、Researcherである」と教

わり、それを信条としてきました。私はこれまで医局に属さず、いわば“フリーランス”としてこの理念を追求してきました。まさか自分が医局を主宰する日が来るとは思ってもみませんでした。

とはいえ、医局に属さなかったからといって、指導者がいなかったわけではありません。多くの尊敬するメンターに、節目節目で道を示していただきました。こうした“メンタリング”は、医局外での成長手段として、今後ますます重要になると感じています。私自身も、教授として後進に道を示す“伝統的なメンター”でありたいと考えています。ただし、メンターには、Coach（技能指導者）、Sponsor（機会提供者）、Connector（人をつなぐ者）という3つの役割があるとされており、必要に応じて異なるタイプの指導者を求めることも、これからの医師の成長において欠かせない視点ではないでしょうか。

また、ProfessorとはPhysicianであると同時に、Administrator（管理者）、Diplomat（交渉者）、

Fundraiser（資金調達者）でもあるべきだと考えています。今後はこれらの役割も果たせるよう、組織の長として自身の成長を目指していきたいと思っています。

現在は、“Quiet Evolution”という考え方をICUに浸透させることに尽力しています。人も組織も、いつもと同じことを繰り返すのが最も楽です。しかし、それではいずれ退化してしまいます。私はICUチームに「昨日と同じではいけない」と日々伝え、少しずつでも変化を促しています。プロフェッショナルとは、リスクを引き受ける存在であり、我々のように命に直結する分野では、ゼロリスクはあり得ません。たとえリスクがあっても、正しく、より良いプロセスを選択できる後進を育てることが、私の使命だと考えています。

最近では「タイパ」や「コスパ」を重視する若手医師も増えてきました。しかし、医師の職業は“ビジネスマン”ではなく“専門職”です。経済学においても、専門職の報酬とは、金銭や地位、名誉だけでなく、「仲間からの賞賛」や「自己成長」にあるとされています。専門家の良し悪しは、専門家でない人には測れません。

大学4年の夏、Duke大学へ臨床実習に赴いた経験があります。周囲からは「まだ日本でも実習が始まっていないのに意味があるのか」と言われました。しかし、複数のドクターヘリが飛び交う救急の現場、多数の移植手術が並行して行われる手術室、そしてその後のICUは非常に刺激的でした。現地で出会った留学中の日本人医師の姿に勇気もらい、「どこで研修するかが最も大切だ」という米国レジデントの言葉に背中を押され、東京へ出る決意をしました。この経験は、医学的な知識以上に、私のその後の人生を方向づける大きな転機となりました。

私は愛媛の地元に戻った際にどんな患者さんにも対応できるよう、ER型救急医として、さらに入院後も対応できるようにHospitalistやIntensivistとしてのトレーニングを積んできました。コロナ禍や超高齢化社



会のなか、動けない軽症患者の増加や、重症対応可能な医師の減少を受け、自分の力を効率よく役立てるため、救急外来から一歩引き、Rapid ResponseやICUを中心とした活動へと移行しました。

実は、現在のポストに就く前は、家の近くの病院で、残りの医師人生を「タイパよく、コスパよく」過ごすことも考えていました。しかし、昭和医科大学の遠隔集中治療を見学した際、「ここでなら、これまで培ってきた力を活かし、新しい医療の形を創れる」と確信し、心が大きく動きました。そして、その遠隔集中治療を率いていた教授こそ、25年前にDuke大学のICU回診でお世話になった方だったのです。四半世紀ぶりの再会でした。

効率ばかりを求める時代にあって、「留学は無駄ではないか」「有名病院でなくても情報は得られる」と言われることもあります。しかし、私はあえて言いたい。「無駄こそ、最高の贅沢」です。私は、ただただやりたいことをやってきただけですが、それが今日の自分を形づくりました。次世代を担う方々には、自分の「好き」や「やりたい」に素直でいてほしい。そして、無駄を惜しまず、変化を恐れず、変わり続ける医師であってほしいと願っています。

略歴

- 平成9年3月 愛媛県立松山東高等学校 卒業
- 平成16年3月 香川医科大学医学部 卒業
- 平成16年4月 三井記念病院
- 平成18年4月 聖路加国際病院 救急部
- 平成23年5月 ハーバード公衆衛生大学院 修了
- 平成23年7月 筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター・水戸協同病院 救急科 准教授
- 平成27年4月 筑波メディカルセンター病院 救急診療科 専門科長
- 平成29年1月 順天堂大学医学部 救急災害医学研究室・総合診療学講座 前任准教授
- 令和2年4月 筑波記念病院 救急科・集中治療科 救急センター長
- 令和6年11月 昭和大学医学部 集中治療医学講座 准教授
- 令和7年4月 昭和医科大学医学部 集中治療医学講座 主任教授（現職）
筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野 客員教授

退任挨拶

医学部教授退任挨拶

「顕微鏡一筋に28年、そしてこれから」



香川大学理事・副学長（教育担当）
組織細胞生物学

荒木 伸一

2025年3月末をもちまして、香川大学医学部教授を退任いたしました。1997年10月に香川医科大学第2解剖学初代教授の波多江種範先生から助教授（今で言う准教授）としてお招きいただき、准教授として約10年、そして波多江教授の後任として組織細胞生物学の教授を18年、通算28年にわたり香川医科大学・香川大学でお世話になりました。その間、研究者・教育者として最高に楽しく充実した時を過ごすことができた香川医科大学・香川大学と皆様の温かいご支援ご厚情に深く感謝申し上げます。

もともと波多江先生とはほとんど面識はなく、私が愛媛大学の助手のころ、解剖学会地方会で発表した演題の座長をして頂いた際に挨拶を兼ねて数分間の立ち話をしたただけでした。おそらくこのときの電子顕微鏡（電顕）研究の会話が縁となり、後に香川医大にお招き頂き、教授職を継ぐことになったのだと思います。あらためて、幸運なご縁であったと感じております。

私が電顕を使って研究を始めたのは山口大の獣医学部生のころで、電顕による研究はまだ隆盛期にありました。しかし、香川医大に赴任した1990年代では電顕はすっかり斜陽の分野となっていました。幸いにもハーバード大学留学中に従事した生きた細胞内で微細構造や分子を高分解能光学顕微鏡下で可視化する技術（今で言うライブセルイメージングの先駆け）が注目されつつあり、これをもって主にマクロファージの飲食作用（マクロピノサイトーシスとファゴサイトーシス）の分子機構解明に取り組みました。当時は今のようにより市販の顕微鏡システムでライブセル観察ができるような時代ではなく、自分で海外から顕微鏡周辺機器を少しずつ取り寄せイメージングシステムを自作したのも楽しい思い出です。ライブセル顕微鏡動画解析や光遺伝学によるタンパク質活性光制御など研究のトレンドを少し先取りできたおかげで、科研費研究代表者として基盤(B)2件、挑戦萌芽2件、基盤(C)5件など継続的に外部資金を獲得することができ、研究室自前のイメージングシステム2台を有する比較的恵まれた環境の中で研究を遂行することができました。教員定員の不補充によるマンパワーの不足が常に課題ではありましたが、それでも良い研究室メンバーに囲まれ、平和で楽しく研究を続けられたことは何よりの幸運でした。

教育においては、解剖学の中で組織学（とりわけ顕微鏡実習）に力を入れ、組織観察を通じて将来的に研究や臨床にも通ずる観察力・洞察力を養うべく可能な限り自ら学生実習指導に当たってきました。おかげで

学生との距離も近くなり、研究室には多くの学部生が訪れるようになりました。一緒に昼食をとったり、お菓子を囲んで談笑したり、時には研究の手伝いをしてもらえることもあり、学生との交流から得られる有益な情報や気づきは多くありました。しっかりと研究をしてくれる学生もおり、学会発表や英文論文を出版するに至ることも珍しくありません。一緒に顕微鏡を観て、ちょっとした発見の喜びや研究成果を形にして世界に発表する達成感を共有することで「研究の楽しさ」を伝えることができたのではないかと感じております。私共の基礎研究は、その成果が直ぐに社会に役立つというものではありませんが、「研究の楽しさ」を知った学生たちが、いずれリサーチマインドを発揮し、社会に貢献してくれることを願ってやみません。

医学部管理運営では、入試担当副学部長（入試委員長）、大学院教育研究担当副学部長、医学科教育担当副学部長（医学科長・学務委員長）を務めさせて頂きました。入試担当時には、後期入試前日に東日本大震災があり急遽追試験を実施することになりましたし、学務委員長在任中には新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、対面授業・実習の制限や課外活動の禁止など、前例のない対応に追われる日々が続きました。学生や教職員には無理をお願いし、多大なるご負担をおかけしましたが、皆様のご理解ご協力のおかげで大過なく乗り越えることができたこと、改めて御礼申し上げます。

私は医学部教授を退任しましたが、昨年11月に理事・副学長（教育担当）を拝命し、現在も香川大学本部で勤務を続けさせて頂いております。長年携わった大好きな顕微鏡の研究からは離れ、禁断症状にも似た顕微鏡への思いに耐えつつ、日々、大学の管理運営に関わる職務に専念しております。急速な少子化、人口流出が進む中、財政的にも地方国立大学はどこも厳しい状況に置かれていますが、学生本位の教育と社会のための人材育成を発展、維持できるよう努めて参ります。これからも地域に根差しつつ、世界に輝きを放ち続ける香川大学であるよう微力ながら力を尽くしていく所存です。引き続き皆様には各方面でご支援ご協力をお願いすることになるとは思いますが何卒よろしくお願いいたします。

最後になりますが、これまでお世話になった皆様方に厚く御礼申し上げますとともに、讚樹會ならびに香川大学医学部の更なる発展と、皆様方のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

医学部教授退任挨拶

何事も楽しんで生きる



香川大学名誉教授
公衆衛生学 平尾 智広

私が初めて香川大学に来たのは、今から約30年前、救急車で揺られてのことでした。消化器系の難病を患っていた私は、激しい症状のために著しく消耗しており、即刻入院となりました。その後数回にわたり大学病院でお世話になったのですが、自身の人生の大半を香川大学で過ごすことになるとは、当時は想像もしていませんでした。

私が医師を志したのは、発展途上国での医療協力を携わりたいと思ったからでした。そのため卒業後研修は一般病院で行い、初期研修終了後に研修病院が行っていた東アフリカでの巡回診療に加わることができました。当時は一般外科医を志していましたが、アフリカの医療現場を目の当たりにして、限られた環境の中で医療を支えるには、社会の仕組みそのものを整える必要があるのではないかと強く感じるようになりました。そんな中で偶然出会った一冊の本に、私の問いに対するヒントが記されており、パブリックヘルス（公衆衛生）の視点で医療を学ぶことの意義を知ったのです。幸いなことに、米国の公衆衛生大学院に進学することができ、パブリックヘルスの基礎を学び始めました。しかし、冒頭に述べた病気が再発し、やむを得ず断念。実家での療養を続けることとなったのです。

香川大学では第三内科に入院していました。当時の主宰は西岡教授で多くの若手医師が修練を行っていました。大学と言えば教授回診ですが、当時は大名行列とも言われた大人数の回診を受けることになり、いつもとは違う貴重な体験をさせていただきました。また、病院の患者食にうどんがでることがあり、さすが讃岐と思ったものです。治療の方は寛解と増悪を繰り返してなかなか進まないため、第一外科より兵庫医科大学を紹介していただき、3回の手術を行うことによりようやく社会復帰することができました。復帰後は、中断していたパブリックヘルスの勉強を続けたかったのですが、体力的にも経済的にも厳しい状況で、その時実家から通える香川大学衛生・公衆衛生学の門を叩いたのです。当時は實成教授が主宰されていましたが、快く入門の許可をいただき、大学院を経て、そこから香川大学でのキャリアが始まったのです。

私は病院管理や医療政策に関心を持っていたため、

医療管理学の分野を担当することとなり、並行して東京の国立医療病院管理研究所の研究員も務めさせていただきました。教授就任後は、附属病院の経営担当として副病院長を7年半務め、3名の病院長のもとで病院運営に携わることになりました。当時の病院経営も課題は山積でしたが、幸いにも診療報酬制度の内容を着実に実行することで、病院の収益改善につなげることができました。当時取り組んだ大きな課題としては、南病棟や手術棟の増築、病院機能評価の初回受審、厚生労働省による特定共同指導、卒業臨床研修センターの支援、女性医師支援システムの構築などがありました。その都度、多くの診療科の先生方、事務局や看護部の皆様、各部局の方々にご尽力いただきました。いつも無理なお願いをしていたと思いますが、結果として様々な問題が良い方向へと進んだことは、皆様のご協力の賜物であると深く感謝しております。現在も大きな困難があると伺っておりますが、皆様の力により、乗り越えていけるものと確信しております。

さて、私はこの3月に大学を去りましたが、大学や病院では、これから多くの乗り越えるべき課題があると考えています。また、これは組織のみならず、私たち個人、あるいは地域や、国家の課題かもしれません。私を含めて多くの努力が必要と思いますが、ぜひ香川大学医学部の一員であることを誇りとし、何事も楽しんで通り抜ける精神で進んでいただきたいと思います。

またどこかでご一緒するときは、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



医学部教授退任挨拶

働き方改革の中で質の高い急性期医療システムを作る



香川大学名誉教授
救急災害医学

黒田 泰弘

高齢化、人口減少の現況において、医師偏在（地域偏在、診療科偏在、開業偏在）が進み、その上で多くの病院の経営状況が悪化しています。また大学病院において医師の研究に割ける時間は少ないとの報告があります。頑張っているのに病院が赤字といわれ辛い気持ちの中で、時間を削り出して学会発表・論文執筆している訳です。わたしは働き方改革を進めつつ質の高い急性期医療システムを作ることが重要と思っていますし、そのためには働いている職員がまずhappyであることが必要であることは言うまでもありません。

香川県は救急搬送の不应需（＝病院が救急車の受け入れ要請を断る）率が高く、他県に搬送される事例も発生しています。不应需が問題になるのは重症よりも中等症・軽症です。県内唯一の大学病院には、県全体の救急医療を俯瞰し全体としてbetterとなるように指導する役割があります。日本救急医学会は、2023年11月24日に「地域救急医療への影響を鑑みた医師の働き方改革に関する提言」*を厚生労働大臣に要望書を提出しました。その中に「地域全体で救急医療の質を低下させることなく長時間労働の解消に取り組むためには、救急医療、とくに初期（＝軽症）・二次（＝中等症）救急診療は医療機関および地域医療圏の全診療科で担うとの認識ととりくみが必要です」と記載しています。

現在、専門としている神経集中治療の関連のある病院で働いています。人口50万人程度をカバーする2次病院です。救急隊にはどんどん受け入れるから電話してくださいと話しています。病院ERスタッフと地域消防との懇親会では各消防の幹部も救急隊長も若手も多数参加してくれて大きく盛り上がりました。消防、救急隊員を大事にして患者を搬送してもらって診療することで地域からの信頼を勝ち得ると同時に病院収益につながっていると思われる状況です。そしてその上で頭部外傷、脳卒中、けいれん、意識障害など神経救急を中心に重症患者をとって診療も研修も充実させるという作戦です。もちろん2次病院なので外傷性ショックなどは対応が難しいですが、救急搬送件数は1日20台、年間8,000台程度で、さらに増やして年間10,000台くらいを目指す方針です。このためには、救急外来は看護師が10名、病院救急救命士が4名、医師

3名くらいで担当しています。これくらい救急外来にヒトを充実させることが必要なのだと改めて思いましたし、1次から3次救急に近い患者を病院全体で対応するわかりやすいシステムと改めて思いました。

この状況と香川県の実情を比較してもbetterな部分とそうでない部分が混じりあって、一概に評価できません。救急医療は県全体の多数の病院を面で連携することが重要なのですが、ただヒトモノハコが分散すると効率が悪いです。上記のような1次から3次近い患者をすべて受け入れるために救急外来にかなりのヒトモノハコを割り病院全体で救急医療を行う中規模の2次病院体制を作るとはより効率的と考えます。たとえば大学病院は救命救急センターですが、ERを加えて全診療科、全職種で上記の日本救急医学会提言趣旨をご理解いただき対応し、救急患者をすべて受け入れて速やかに治療して他院に下り搬送させることが県内救急搬送の不应需問題の解決につながると考えます。

いまでもしんどい思いをして自分の時間がないのにさらに多くの救急患者をとるの？と言われると思います。でもこの危機はチャンスです。救急患者が増えて研修医や専攻医がそれを診て満足度があがれば研修医が増え、入局者が増え、病院収益もあがり職員の待遇改善につながるからです。

さらに県全体の救急医療を俯瞰することはそのまま災害医療につながります。南海トラフ地震において大学病院は、耐震性も問題なく、高速道路のすぐ横でライフラインの問題もなく、液状化も起こらず、津波もこず、さらに機能が温存できる高松空港が近い、メリットを活かすことができるからです。

最後に讃樹會の皆様には2004年3月より21年間にわたり本当にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。



* https://www.jaam.jp/info/2023/files/info-2023_working_style_reform.pdf

新任教授就任挨拶

教授就任にあたって

ふるさとで紡ぐ、学びと探求の未来

香川大学医学部 形態・機能医学講座分子生理学 教授

ふじむら あつし
藤村 篤史



香川大学医学部同窓会讃樹會の皆さまにおかれましては、益々御清栄のこととお慶び申し上げます。このたびご縁をいただき、令和7年4月1日付で分子生理学教室の第4代教授として着任いたしました、藤村篤史と申します。長年、県外・国外の研究機関で生理学教育と研究に従事してまいりましたが、生まれ育った地・香川県で、再び学びと向き合う機会を得られたことに、言葉にならない喜びと責任を感じております。微力ではございますが、本学の教育・研究の発展に貢献できるよう全力を尽くす所存です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は、香川県で生まれ育ちました。高校までを東かがわ市（旧 大川郡）白鳥町で過ごし、讃岐の風土や文化、そして温かな人々の中で多くを学び、育てていただきました。大学進学を機に岡山へと出ましたが、讃岐の空の広さや、瀬戸内の穏やかな海、そしてどこか時間がゆったりと流れるような町の空気は、私の心の支えであり、人生の根っことなっています。

岡山大学医学部を卒業してからは、基礎医学の分野で生理学教育と研究に携わる道を歩んでまいりました。主に神経生理学を中心とした教育を担当しながら、細胞の可塑性、すなわち環境や刺激に応じて細胞が柔軟に変化する能力について、遺伝子発現・代謝制御・細胞運命といった多角的な視点から研究を続けてきました。これらの研究は、がん、再生医療、神経変性疾患など、さまざまな疾患の理解や治療戦略の構築に応用可能な領域であり、日々進展する生命科学の中で、基礎から臨床への橋渡しを意識して取り組んでおります。

香川大学では、神経生理学の講義や実習を担当させていただきます。神経系は、人間の感覚、運動、感情、さらには思考に至るまで、まさに「人らしさ」を形作る中心的なシステムです。授業では、シナプスやニューロンの電気的活動といったミクロな話題から、全身の神経ネットワークの統合的な働きまでを、できるだけイメージしやすく、かつ興味を持ってもらえるよう、工夫を重ねています。とくに大切にしているのは、学生の「アウトプット能力」を引き出すことです。どれだけ良い知識を持っていても、それを的確に伝えられなければ、医療現場や研究の場では力を発揮できません。それゆえ授業内では、自分の考えを言語化し他者に伝える経験を積んでもらうことや、生理現象の要諦を見抜きそれを表出化する能力を育てることに注力しています。自ら問いを立て、自ら考え、他者に伝えられる医学生・研究者を育てることが、私の教育の

目標です。

研究室では学部生、大学院生、そして教員や事務員とともに、多様なテーマに取り組んでいます。近年では、がん細胞が代謝のかたちを柔軟に変えながら環境に適応するメカニズムや、発生過程における細胞運命決定の背後にあるエピジェネティクス・エピトランスクリプトミクスの制御などに特に注目しています。これらの研究は、「固定された存在」としての細胞観を打ち破り、動的で環境応答的な生命の理解へとつながると信じています。

香川県に戻ってきてまず感じたのは、自然の豊かさや、どこか肩の力が抜けるような人のあたたかさでした。この環境の中で、若い世代とともに学び、問い、探求できることは、何にも代えがたい喜びです。ふるさとの地で、自分の歩んできた道を還元し、そして未来に向けて新たな一歩を刻む—そんな節目に立っていることを、深くありがたく思っております。

今後は、香川大学という地域に根ざした大学でありながら、全国・世界へと広く開かれた視点を持ち、生理学教育と研究の両輪を大切にしていきたいと思います。研究室の中だけで完結することなく、学生一人ひとりの個性と可能性を引き出しながら、また、医学が社会にどう貢献できるのかという大きな問いにも向き合いながら、教室員一同、実直に歩みを進めてまいります。

どうぞ今後とも、ご指導・ご鞭撻のほどを何卒よろしくお願い申し上げます。

略歴

- 平成21年3月 岡山大学医学部医学科 卒業
- 平成23年3月 岡山大学病院卒後臨床研修センター（医科）修了
- 平成24年9月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 修了
- 平成25年2月 イタリア・パドヴァ大学分子医科学教室（S. Piccolo研究室）
日本学術振興会 海外特別研究員
- 平成27年6月 熊本大学大学院生命科学研究部（分子生理学教室）特任助教
- 平成29年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（細胞生理学）助教
- 令和5年5月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（細胞生理学）研究准教授
- 令和7年4月 香川大学 医学部 形態・機能医学講座（分子生理学）教授

教授就任にあたって

～知と人材のネットワークから次世代医学を拓く～

香川大学医学部 形態・機能医学講座組織細胞生物学 教授

みやき しげる
味八木 茂



令和7年5月1日付で香川大学医学部 組織細胞生物学教室の教授を拝命いたしました味八木 茂と申します。この度、讃樹會の皆さまにご挨拶の機会を頂戴し、心より感謝申し上げます。本教室は、初代教授波多江 種宜 先生、二代教授 荒木 伸一 先生により築いてこられた教室であり、その後任を務めさせていただくことに、あらためて身の引き締まる思いであります。

私は東京都に生まれ、東京薬科大学生命科学部を卒業し、2004年に筑波大学大学院医学研究科（整形外科・落合直之 教授）にて学位を取得いたしました。この間の研究は、産業技術総合研究所（つくば）にて行い、当時注目されつつあったティッシュエンジニアリング（組織工学）の分野において、軟骨や腱・靭帯といった運動器組織の再生をテーマに臨床医やエンジニア、分子生物学者など多様な分野の方々と協働しながら基礎研究者としての第一歩を踏み出しました。学位取得後は、国立成育医療研究センター研究所に新設された浅原弘嗣 先生（現・東京科学大学大学院 システム発生・再生分野教授）の研究室立ち上げに携わらせていただくという貴重な機会をいただき、基礎研究者としての礎を築かせていただきました。2007年からは米国カリフォルニア州サンディエゴにあるスクリプス研究所分子医学部門に異動し、Martin Lotz先生・浅原先生のご指導のもと変形性関節症を中心とした運動器疾患の分子病態解明および治療標的の探索に従事いたしました。スクリプス研究所は、これまでに多くのノーベル賞受賞者を輩出した世界有数の私立研究機関であり、太平洋を望む雄大な景観と名門トーリーパインズゴルフコースに隣接する絶好のロケーションにあります。その周辺は大学、研究機関、バイオテック企業が集積する一大サイエンスパークが形成されています。この先端的・国際的な研究環境の中で得られた知見やネットワークは、今なお私の研究姿勢を支える礎となっております。そして、2011年東日本大震災直後の3月末に帰国してからも、広島大学病院未来医療センターおよび整形外科教室において、越智 光夫 先生（現・広島大学学長）、安達 伸生 先生（現・広島大学病院長・整形外科教授）のもとで骨・軟骨・腱などの運動器組織の再生や病態解明に関する研究を一貫して継続してまいりました。特に、遺伝子改変マウス

を用いて、ノンコーディングRNAでありますmiRNAに着目した関節軟骨の加齢変化や変形性関節症の進行に関わる分子機構の解明、治療標的としての組織幹細胞の同定ならびに幹細胞由来エクソソームを用いた新たな治療戦略の開発に力を注いでおります。

このたび新たな拠点として香川大学にて本教室を主宰させていただくにあたり、これまで国内外の研究機関や異分野研究者との協働を通じて得た経験や知見を活かし、知と人材のネットワークから次世代医学の扉を開いてまいります。また、「基礎から臨床へ、臨床から基礎へ」という橋渡し研究を一層推進し、医学・医療の発展に貢献してまいりたいと存じます。さらに、医学生・大学院生・若手研究者・研究医の教育・育成にも注力し、基礎医学の面白さと意義を伝えるとともに、単なる知識の習得にとどまらず論理的・科学的思考力を育む教育を展開してまいりたいと存じます。

最後になりますが、香川大学に迎えていただきました医学部長・西山教授、病院長・門脇教授、神経機能形態学・三木教授をはじめとする諸先生方に厚く御礼申し上げますとともに、讃樹會の皆さまには今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

略歴

- 平成16年3月 筑波大学大学院医学研究科 修了 博士(医学) 取得
- 平成16年3月 国立成育医療センター研究所移植・外科研究部 流動研究員
- 平成19年6月 スクリプス研究所分子医学部門 Research Associate
- 平成21年6月 スクリプス研究所分子医学部門 Sr. Research Associate
- 平成23年3月 広島大学病院未来医療センター 講師
- 令和3年10月 広島大学病院臨床研究開発センター 細胞加工支援部門 細胞加工支援室 室長 兼任
- 令和5年6月 広島大学病院未来医療センター 特定教授 称号付与
- 令和7年5月 香川大学医学部 組織細胞生物学 教授

令和7年度 讃樹會研究助成金／研究奨励金 選考結果

速報

部門	受賞者	研究題目
研究助成金	宮井 由美 (平成17年卒) 香川大学医学部 炎症病理学	「CaMKKβに着目した小葉癌の進展に関わる分子メカニズムの解明」
研究奨励金	森本 絢 (平成23年卒) 香川大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター	「早産児脳を護るための層別化カフェイン療法：脳循環酸素代謝変動と自律神経機能評価によるリスク分類」

◆選考過程のご報告◆

第21回（令和7年度）讃樹會研究助成者及び研究奨励者について選考を行いました。研究助成金部門は3件、研究奨励金部門2件の全5件の申請があり、学外評価委員13名によって評価を受けました。

評価に当たって、学外評価委員が正当に評価できないと判断した申請書に対しては、採点しなくてもよいこととしております。採点無しというケースを可能な限り少なくするべく、提出された申請内容に鑑み、専門に近い学外評価委員5名を選定し、COIに抵触しないことを委員本人に確認の上、具体的には学外評価委員一人につき、2～3件の採点をお願いしました。

採点は6つの項目（1. 研究課題の学術的重要性・妥当性、2. 研究計画・方法の妥当性、3. 研究課題の独創性・革新性、4. 研究課題の波及性、5. 研究の実現性、6. 研究の学術的優先度）に対して、それぞれ5段階評価（5点：極めて高い、4点：高い、3点：やや高い、2点：やや低い、1点：低い）を行って頂き、合計点を平均しました。

以上の厳正なる審査の結果、獲得点数は、研究助成金部門では宮井由美先生の「CaMKKβに着目した小葉癌の進展に関わる分子メカニズムの解明」（4.17点／5点満点）が第一位となりました。研究奨励金部門では森本 絢先生の「早産児脳を護るための層別化カフェイン療法：脳循環酸素代謝変動と自律神経機能評価によるリスク分類」（3.60点／5点満点）が第一位となりました。

また、今年度の全体平均点は3.55点／5点満点でした。

学外評価を基に8月5日開催の令和7年度第2回

理事会において、宮井由美先生に金壱百万円、森本絢先生に金五十万円を授与することを正式に決定しました。

両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

学外評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償でご協力頂きましたことを誌上からではございますが、心から感謝申し上げます。

讃樹會研究助成 学外評価委員 (敬称略)

臨床科

氏名	
1 伊藤 進	香川大学 名誉教授
2 今井裕一	愛知医科大学 名誉教授／多治見市民病院 病院長
3 千田彰一	香川大学 名誉教授
4 原 量宏	香川大学名誉教授／医学部医療情報学 客員研究員
5 水野博司	順天堂大学医学部形成外科学講座 教授
6 吉栖正生	広島大学大学院医系科学研究科心臓血管生理医学名誉教授／安田女子大学看護学部 教授

基礎科

1 梶谷文彦	川崎医科大学名誉教授／川崎医療福祉大学客員教授／岡山大学特命教授／北海道大学客員教授
2 小林良二	香川大学 名誉教授
3 阪本晴彦	香川大学 名誉教授
4 田畑泰彦	京都大学名誉教授／京都大学大学院医学研究科 形成外科学「細胞バイオテクノロジー」田畑グループ 特任教授
5 徳光 浩	岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域 バイオ・創薬部門 細胞機能設計学 教授
6 西堀正洋	岡山大学学術研究院医歯薬学域 創薬研究推進室 特命・特任教授
7 森田啓之	東海学院大学健康福祉学部管理栄養学科 教授

令和6年度会計報告

令和6年度収支計算報告書

令和6年4月1日から令和7年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科目	予算 A)	決算 B)	差額 B) - A)
1. 事業活動収入			
①会費・入会金収入	8,000,000	5,990,000	-2,010,000
②寄付金・広告収入	850,000	930,000	80,000
③委託手数料収入	3,450,000	3,473,878	23,878
④利息	0	2,139	2,139
事業活動収入計	12,300,000	10,396,017	-1,903,983
2. 事業活動支出			A) - B)
①事業費支出			
会報制作費	950,000	1,053,085	-103,085
後援協賛事業費	550,000	564,670	-14,670
支部・同期会費	200,000	199,181	819
学術助成金事業費	1,650,000	1,596,597	53,403
国外留学助成金事業費	1,000,000	750,000	250,000
学生援助費	800,000	580,000	220,000
国際交流協力費	200,000	49,350	150,650
地域連携推進事業費	100,000	50,000	50,000
研修医協力費	700,000	676,192	23,808
総会費	300,000	402,117	-102,117
講演会費	400,000	416,450	-16,450
学会助成金事業費	200,000	60,000	140,000
事業費支出小計	7,050,000	6,397,642	652,358
②管理費支出			
事務人件費	2,200,000	2,021,800	178,200
事務局・各委員会運営費	1,200,000	1,226,099	-26,099
ホームページ管理費	55,000	55,000	0
通信費	1,350,000	950,149	399,851
慶弔費	250,000	162,045	87,955
雑費	90,000	77,345	12,655
予備費	100,000	-	100,000
管理費支出小計	5,245,000	4,492,438	752,562
事業活動支出計	12,295,000	10,890,080	1,404,920
当期事業活動収支差額	5,000	-494,063	
③特別収入			
同窓会館建設引当金取崩益		16,000,000	
④特別支出			
香川大学医学部同窓会同年代別基金寄付金		10,000,000	
特別収支差額	0	6,000,000	
前期繰越収支差額	50,724,150	50,724,150	
次期繰越収支差額	50,729,150	56,230,087	

貸借対照表

令和7年3月31日現在

単位：円

資産の部	金額	負債及び 正味財産の部	金額
資産		負債	
1. 流動資産	(56,230,087)	1. 流動負債	(0)
現金・預金	56,230,087		0
2. 固定資産	(0)	正味財産	56,230,087
	0		
合計	56,230,087	合計	56,230,087

財産目録

令和7年3月31日

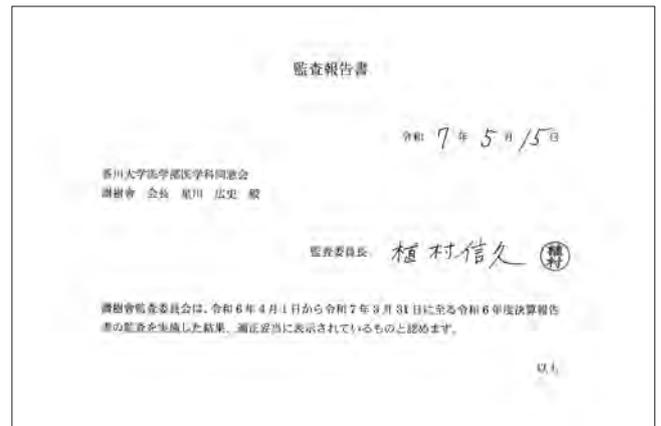
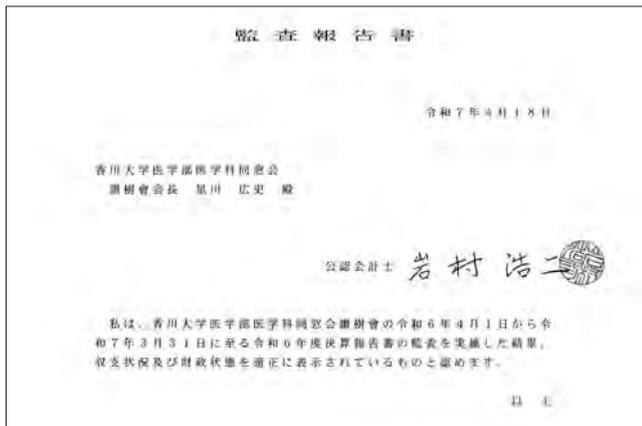
単位：円

資産の部		金額
1. 流動資産		
(1) 現金・預金		
イ) 手許現金		152,670
ロ) 普通預金	百十四銀行三木支店	1,759,417
ハ) 郵便貯金	郵便振替貯金事務センター	37,038,843
ニ) 定期預金	香川銀行本店営業部	10,196,805
	百十四銀行医大前出張所	7,082,352
	流動資産合計	56,230,087
	資産合計	56,230,087

固定資産の内訳

(令和7年3月31日現在)

資産の名称	数量	取得年月	取得価額	償却方法	耐用年数	償却率	当期償却額	未償却残高
該当なし								
			-				-	-



令和7年度予算

令和7年度予算

令和7年4月1日から令和8年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科 目	7年度予算	6年度予算	6年度決算
1. 事業活動収入			
①会費・入会金収入	8,000,000	8,000,000	5,990,000
②寄付金・広告収入	850,000	850,000	930,000
③委託手数料収入	3,600,000	3,450,000	3,473,878
④利息		0	2,139
事業活動収入計	12,450,000	12,300,000	10,396,017
2. 事業活動支出			
①事業費支出			
会報制作費	950,000	950,000	1,053,085
後援協賛事業費	580,000	550,000	564,670
支部・同期会費	200,000	200,000	199,181
学術助成金事業費	1,650,000	1,650,000	1,596,597
国外留学助成金事業費	500,000	1,000,000	750,000
学生援助費	800,000	800,000	580,000
国際交流協力費	200,000	200,000	49,350
地域連携推進事業費	50,000	100,000	50,000
研修医協力費	1,000,000	700,000	676,192
総会費	0	300,000	402,117
講演会費	400,000	400,000	416,450
学会助成金事業費	0	200,000	60,000
事業費支出小計	6,330,000	7,050,000	6,397,642
②管理費支出			
事務人件費	2,500,000	2,200,000	2,021,800
事務局・各委員会運営費	1,300,000	1,200,000	1,226,099
事務局設備投資費	940,000		
ホームページ管理費	55,000	55,000	55,000
通信費	1,300,000	1,350,000	950,149
慶弔費	250,000	250,000	162,045
雑費	100,000	90,000	77,345
予備費	100,000	100,000	0
管理費支出小計	6,545,000	5,245,000	4,492,438
事業活動支出計 (①+②)	12,875,000	12,295,000	10,890,080
当期事業活動収支差額	-425,000	5,000	-494,063
特別収支差額	0	0	6,000,000
前期繰越収支差額	56,230,087	50,724,150	50,724,150
次期繰越収支差額	55,805,087	50,729,150	56,230,087

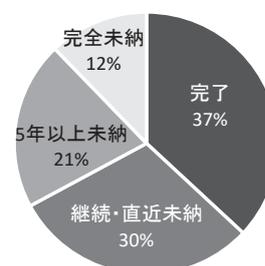
会費納入状況報告

【会費納入状況】

	人数	割合
完了	1437	37%
継続・直近未納	1172	30%
5年以上未納	805	21%
完全未納	474	12%
計	3888	

会費納入状況

■ 完了 ■ 継続・直近未納 ■ 5年以上未納 ■ 完全未納



(人)

卒年別会費納入状況

「完了」20年分納入済、「継続」3年以内納入済、「直近未納」3～5年納入済、「5年以上未納」未納が5年以上、「完全未納」支払い実績無し

期	卒年	会員数	完了 (終生 会員)	継続	直近 未納	5年 以上 未納	完全 未納
1	昭和61年	71	40	0	0	13	18
2	昭和62年	84	47	0	0	11	26
3	昭和63年	86	55	0	0	9	22
4	平成元年	97	65	0	0	7	25
5	平成2年	95	59	0	0	13	23
6	平成3年	100	65	0	0	5	30
7	平成4年	107	56	0	0	18	33
8	平成5年	97	56	0	0	13	28
9	平成6年	84	55	0	0	8	21
10	平成7年	85	58	0	0	13	14
11	平成8年	106	56	0	0	12	38
12	平成9年	87	53	0	0	12	22
13	平成10年	89	55	0	0	34	0
14	平成11年	95	62	0	0	29	4
15	平成12年	97	62	0	0	24	11
16	平成13年	76	43	0	0	30	3
17	平成14年	114	70	0	0	39	5
18	平成15年	91	50	0	1	30	10
19	平成16年	98	47	0	1	45	5
20	平成17年	100	52	0	1	41	6

期	卒年	会員数	完了 (終生 会員)	継続	直近 未納	5年 以上 未納	完全 未納
21	平成18年	81	34	0	1	45	1
22	平成19年	92	29	1	1	59	2
23	平成20年	89	42	1	0	43	3
24	平成21年	90	38	2	1	44	5
25	平成22年	103	42	3	1	50	7
26	平成23年	97	43	1	29	15	9
27	平成24年	89	26	2	35	20	6
28	平成25年	96	24	54	0	14	4
29	平成26年	88	11	58	0	15	4
30	平成27年	99	24	58	0	16	1
31	平成28年	104	2	73	0	20	9
32	平成29年	110	4	90	1	7	8
33	平成30年	103	3	63	1	26	10
34	平成31年	117	2	82	1	25	7
35	令和2年	113	4	70	26	0	13
36	令和3年	101	1	72	21	0	7
37	令和4年	114	1	104	0	0	9
38	令和5年	114	0	103	0	0	11
39	令和6年	118	1	111	0	0	6
40	令和7年	111	0	103	0	0	8
	計	3888	1437	1051	121	805	474

日頃より同窓会の活動を支えていただきありがとうございます。様々な事業の原資となる大切な会費の納入状況をお知らせします。令和7年、40期生を迎え卒業生総数はおよそ4000名となり、終生会員（会費20年分完納）が全体の3分の1強となりました。今後とも充実した事業活動が運営・継続できますよう、会員の皆様の益々のご協力、ご支援をお願い申し上げます。会費の個別納入状況につきましては、「会員情報」を同封していますのでご確認いただき、不足の場合は納入にご協力いただきますよう何卒宜しくお願い申し上げます。尚、終生会員は納入状況の同封はありませんのでご了承下さい。

理事会議事録

令和7年度第1回理事会 令和7年5月26日(月) 19:30~20:00 WEB開催

当日参加21名及び委任状14名による計35名の参加となり、全理事58名の過半数(29名)に達し理事会が成立した。

1) 令和6年度決算の承認

資料として、収支計算報告書、貸借対照表、財産目録、固定資産台帳、監査報告書が提示され、収支計算報告書に沿って三木崇範事業局長から令和6年度決算の収支が報告された。収入に関しては会費収入が減少した。支出については予算以上の支出となった赤字の項目について説明が行われた。

また、医学部50周年基金に対して同窓会館建設引当金から拠出された1000万円の寄附については、特別会計の形で収支計算報告書に追加されている。同窓会館建設引当金は消滅し、残金は現在、定期預金となっており、何らかの引当金として固定資産扱いとするか、定期預金とするかなど、次回の執行部会並びに理事会でその取り扱いを検討することとなった。

引き続き植村信久監査委員長から監査報告が行われた。参加の全理事により、令和6年度決算が承認された。

2) 令和7年度予算案審議

予算案が三木事業局長から説明された。予算案検討の基資料として、①5月の事務局移転に伴い発生する費用「同窓会移転作業見積書、什器解体・再組立作業見積書」、②地域連携推進事業「がん検診普及啓発イベント後援依頼」が提示された。その他の項目については、おおむね昨年と同じとする。

令和7年度予算について、参加の全理事により承認された。

3) 会員名簿に関するアンケート集計報告

前回の理事会で、新しく会員名簿作成・発行に取り組むことについて賛同があり、形式、費用やWEB版会員名簿のシステムなどについて調査検討していくこととなった。

これを受けて、会員名簿作成に関して会員の意見を伺うためアンケートを実施した。この集計結果を参考として、今後、執行部で会員名簿作成を進めていくことが理事会で承認された。

4) 懇親会援助規定の改訂について

星川広史会長から、「前年度、岡山讃樹會で学生の参加があった。今後もこのような各支部会や同窓会において学生にも支援を行い、できるだけ学生の参画を促して、その後の同窓会活動への参画につなげていき

たい」という説明があり、懇親会援助規定の援助の対象に新たに在學生を追加することが提案され、理事の承認を得て決定した。

同窓会懇親事業に対する援助について

【2025年5月26日改訂版】

第1条 本会は同窓会総会懇親会・支部会・同期会(学年会)・同窓会主催の祝賀会等の開催に際して、参加者が10名以上の場合1人あたり2,000円の援助を行う。

ただし、助成対象は卒業15年目までの卒業生及び在學生で、会費納入者に限る。(以下略)

5) 学生の国際交流推進事業について

安田真之教育支援局長から、海外留学を希望する医学科生が応募する助成金の現状が説明された。他団体の助成金との併給を可能にし、少しでも多く学生が助成金を得られるようにするため、讃樹會の規定に減額可能であるとの条項を追記する提案があり、理事会の承認があった。

令和7年度 讃樹會(医学部医学科)国際交流推進事業要領 【2025年5月26日改訂版】

(抜粋)

学生の留学助成について

希望者は下記の要領を熟読した上で、応募してください。

助成対象

香川大学医学部との協定締結校(準締結校も含む)への短期留学(3週以上)

助成額

- 1) 一人につき金3万円とする。
- 2) 英国長期の留学は一人につき金5万円とする。
- 3) 留学先と期間から総合的に判断し金5万円の助成対象となる場合がある。
- 4) 本人の申し出により、減額となる場合がある。

助成件数

原則として年間20件程度とする。

応募資格

- 1) 香川大学医学部医学科学生であること。
- 2) 上記交流協定に基づく留学であること。
- 3) 本会会費納入が確認された者であること。(以下略)

6) その他

①同窓会としてのサポートについて

「がん予防イベント」などへの後援が地域連携推進事業として同窓会からサポートが続いている。これに見られるように、主催が協会であったり、協賛が香川県や高松市などの行政である場合も含めて、同窓会としてサポートすることについて、今後、何らかの判断基準や枠組みを作っておく必要があると三木事業局長から意見があった。

これに対して、香川県として星川洋一先生から、県としてわずかながら助成しているが、アルバイト代が出せないため、学生に地域事業に関わってもらう機会として、地域貢献も含めてアルバイト代をサポートしていただきたいということで今まで認めていただいている。ルール、規約などが必要であれば是非ご検討いただきたい、と香川県の状況の説明があった。

大西宏明理事長から、イベントの趣旨や、学生さんの参加を募る意図、香川大学の先生方も入った講師陣など、同窓会がサポートしても悪くはないと思えるとの感想が添えられ、こういったサポートに対しての何らかの明確なルール作りについて執行部で検討していくこととなった。

②同窓会報への寄稿について

星川会長から同窓会報への寄稿について、同窓生の教授就任にあたり、同窓会報に就任挨拶の寄稿をお願いしているが、最近は寄附講座の教授や特任教授など様々な職名で就任される方も増えてきており、ご着任を同窓の先生方に広く周知したいので、今後は、寄稿いただく方を今までとは少し枠を広げて紹介させていただきたいと思うとアナウンスがあった。

令和7年度第2回理事会 令和7年8月5日(火) 19:30~20:00 WEB開催

当日参加19名及び委任状17名による計36名の参加となり、全理事58名の過半数(29名)に達し理事会が成立した。

1. 令和7年度研究助成金及び研究奨励金の審査・決定

田岡利宜也学術副局長により選考過程についての説明があった。研究助成金3件、研究奨励金2件の申請があり、学外評価委員13名の採点を集計した審査結果が資料とされた。その結果、評価委員による最高点を獲得した研究助成金部門の宮井由美先生(H17年卒)と研究奨励金部門の森本絢先生(H23年)の受賞が決定した。

2. 学会助成金審査

2026年開催予定の1件のみ申請があり助成が決定した。助成額は要項に則る。

第26回日本死の臨床研究会中国・四国支部大会(2026年4月/高松)助成額3万円。

3. 決算並びに予算について

同窓会館建設引当金残金の会計処理について

事務局から説明があった。令和6年度に、同窓会館建設引当金1600万円から、医学部開講50周年に向けての再開発に1000万円を寄附し、その残金600万円の会計処理について審議された。銀行の補償のある1000万円に増額し114銀行の定期預金とする、仕分け上、固定資産とはしない、今後、何らかの緊急支援が必要となった場合に活用するという執行部案が星川会長から提案され、理事の賛同を得て決定した。

女性医師の会 学生参加援助について

近年、会の活性化や女子学生の増加を背景に、学生参加希望者が増加していることを鑑み、学生の軽食代として、1回につき一人当たり1000円、一回当たり最大10名まで、年5回で予算枠は計50000円とするという安田真之教育研修支援局長の提案が執行部案として提示され、理事の賛同を得て決定した。

4. その他 ホームカミング・ディ2次会懇親会について

昨年に引き続き、医学部主催によるホームカミング・ディを医学部祭に合わせて10月12日(日)14:00~16:00に開催し、夜には高松市内で卒業生同士の交流を目的とした懇親会が予定されていることが星川会長から説明された。コロナ禍も落ち着き、昨年度は、中部、関西、岡山、関東など各支部会が活発に開催されており、香川においても卒業生が集まる良い機会として、讃樹會からも周知・啓発していくことが決定した。

ニュースの窓

令和7年卒／40期生卒業式・祝賀会・謝恩会

令和7年3月24日



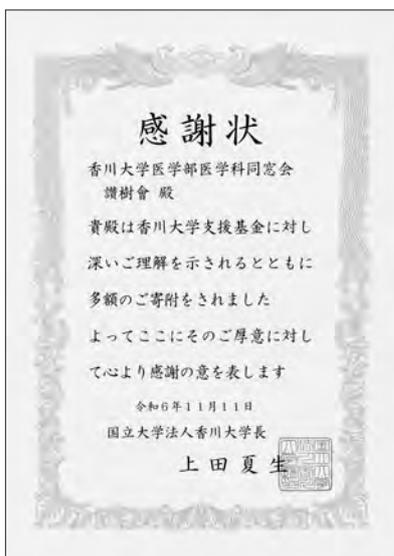
香川大学支援基金医学部開講50周年記念特定基金へ寄附

令和6年10月31日

讃樹會では、令和6年5月開催の第18回定期総会の決定に基づき、香川大学支援基金医学部開講50周年記念特定基金へ、金1千万円の寄附を行いました。

再開発工事が着々と進む医学部は、講義棟・実習棟の改修、新棟の建設を経て、令和7年以降は第3工期～第6工期へと進みます。

「これからの50年のために」をスローガンに、更なる医学部の発展、地域医療への貢献、人材育成を目指す母校への協力が求められています。



令和7年度 新研修医をよろしくお願いたします！ 令和7年4月1日

今春、医科24名・歯科3名の新研修医を本院に迎えました。

新研修医達は、不安と緊張感を感じながらも、各病棟・診療科での研修をスタートし毎日励んでおります。

皆様方には研修医育成へのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

卒後臨床研修センター



令和7年度採用新研修医 2025年3月31日オリエンテーション開始式にて撮影

令和7年度入学式

令和7年4月2日

4月2日（水）、あなぶきアリーナ香川 メインアリーナにて、令和7年度香川大学入学式が執り行われ、学部生・大学院生ら計1707名と保護者、関係者が一堂に会しました。

学部新入生は、教育学部169名、法学部158名、経済学部268名、医学部191名、創造工学部339名、農学部157名、編入学45名の計1327名です。大学院新入生は、創発科学研究科194名、医学系研究科63名、農学研究科63名、教育学研究科19名、地域マネジメント研究科41名の計380名です。医学部191名の内訳は、医学科106名、看護学科64名、臨床心理学科21名です。

上田夏生香川大学長の告辞に続き、来賓池田豊人香川県知事から祝辞が述べられ、学部と大学院それぞれの新入生代表による宣誓、学生代表から歓迎の辞がありました。

最後に、医学部管弦楽団及び吹奏楽団の合同演奏にのせて香川大学学歌斉唱が行われ、広いアリーナに新入生を歓迎する歌声が響きました。

また、今回初めて、式典への卒業生の自由参加も推奨されました。

式典の様子は、YouTube検索「令和7年度香川大学入学式」で視聴できます。



医学部DRI先端医学研究棟竣工記念式典

令和7年5月7日

香川大学医学部DRI先端医学研究棟新設・実習棟改修に伴う竣工記念式典・内覧会に出席して

讃樹會名誉会長 濱本 龍七郎
(昭和61年卒・1期生)

令和7年5月7日(水)13時30分より、香川大学医学部DRI先端医学研究棟2階オープンスペースにおいて、香川大学医学部DRI先端医学研究棟新設・実習棟改修に伴う竣工記念式典が開催されました。

医学部管弦楽団のファンファーレと共に、司会進行の寒川貴司総務課長によって開式の辞が発せられました。

続いて、西山成香川大学医学部長による式辞と上田夏生香川大学学長から祝辞が述べられ、学生代表として医学科5年島田雄飛さんから挨拶がありました。

その後、竣工を記念して、上田夏生学長、国分伸二理事、西山成医学部長、星川広史副医学部長(再開発担当)、島田雄飛学生代表、濱本龍七郎讃樹會名誉会長、宮武伸行医学部後援会会長によってテープカットが行われ、式典がつながり終了致しました。

式典後には内覧会が14時から1時間実施されました。

香川大学開講50周年へ向けての序章になります香川大学医学部DRI先端医学研究棟・実習棟竣工記念式典が開催され、これからの医学部発展が期待される式典であったと思います。

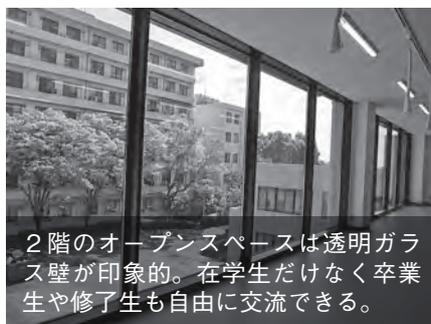
1980年に一期生が入学し、今や卒業生は3948名となり、皆様、県内外で活躍しておられます。

また、医学部においては母校出身の教授は過半数近くを占め、医学部長は西山 成先生(8期生/薬理学教授)、病院長杉元幹史先生(3期生/泌尿器科学教授)が本年10月より就任されます。二人でリーダーシップを発揮され、増々医学部の発展に寄与される事を期待します。

50周年に向け、奉仕の心、社会貢献、リーダーシップという3つのコンセプトを掲げておられ、将来の医療界を担う医大生のため、教育研究設備や環境を整備し、良い医師を育てていただきたいと祈念いたします。



DRI先端医学研究棟
北側外観



2階のオープンスペースは透明ガラス壁が印象的。在学生だけでなく卒業生や修了生も自由に交流できる。



様々な工夫が凝らされ、生まれ変わった実習室

讚樹會事務局移転

令和7年5月8日

讚樹會事務局は令和7年5月8日に、管理棟5階からDRI先端医学研究棟（通称「新棟」）の1階に移転しました。DRI先端医学研究棟は、医学部再開発に伴い研究棟と講義棟の中ほどに新設された3階建の建物です。

これまで同窓会は管理棟5階北側の一室を約25年間、事務局としてきましたが、会議室だけの階のため大変静かでした。新居は、渡り廊下を通る学生さんたちの笑い声も聞こえ、職員の方や先生方、学生さんたちや外国の方など、学内のいろいろな方とすれ違うことが格段に多くなり大学の活気を感じます。

入口横には、書道家小森秀雲先生揮毫の題字額がお迎えしています。室内にも、別バージョンとして特別に書いてくださった「近代性のある」題字が掛けられています。

事務局の住所、電話番号はこれまでと同じです。

月～金は常時開いていますので、いつでもお気軽にお立ち寄りください。



事務局室内。本棚には懐かしいKMUページが並ぶ。



入口の題字額

特集

インタビュー

ベスト指導医

香川大学医学部附属病院 内分泌代謝内科

吉村 崇史先生（平成29年卒・32期生）

インタビュー 卒後臨床研修センター長

安田 真之先生（平成9年卒・12期生）

安田 本年から研修医による投票を行い、吉村先生が令和6年度ベスト指導医に選ばれました。おめでとうございます。連絡を受けた時の率直な感想はいかがでしたか。

吉村 他にも沢山の先生方がいらっしゃる中で、特別自分が優れた指導をしているとは思っていませんでしたので、非常に驚きました。

安田 たくさんの指導医の名前があがりましたが、先生が一番の得票数でした。早速ですが、先生が指導する上で最も大切にしていることは何でしょうか。

吉村 指導側がいきなり答えを言うのではなく、質問して研修医の先生に考えてもらい、答えが返ってきて合っていればそれでいいし、間違っていた場合は何が間違っていたかという疑問をそのままにせず、何かしらの答えを返すということに極力気を付けるようにしているかなと思います。

安田 質問の内容について気を付けていることはありますか。

吉村 研修医の先生との普段の会話や、質問に対する返答の様子などで、研修医の先生の反応を見ながら内容を落とし込んで指導するように気を付けているかもしれません。

安田 印象に残る研修医とのエピソードを教えてください。

吉村 僕が5年目で大学にもどってきた時に、ようやく研修医と関わるようになりました。うちの科は研修の最後に担当した症例の発表があるのですが、その時に上の先生から結構質問があり、それにあまり答えられずに、僕も確かにそこを教えられてなかった、あれ

は教えられてなかったと気づかされることがありました。そういうところは気を付けて指導していった方がよかったなというのがあります。

安田 なるほど。指導していくことばかりじゃなく、気づかされることもあるんですね。逆に先生が研修医だった時に、印象深く覚えているとか、目標にしている指導医はいますか？

吉村 坂出市立病院の麻酔科で一緒に回られていた先生とはずっと一緒にいる感じで大変お世話になり、印象に残っています。あとは研修医時代ではないですが学生の頃非常にお世話になった再受験のおじさんが目標とする医者の方です。

安田 指導の中でその先生から影響を受けたことがありますか？

吉村 厳しく厳格な先生というよりは、比較的フランクな、雑談を交えながら、でもしっかり指導していただけた感じだったので、僕もできるだけ研修医と厳しくというより距離近く雑談とかもしながら指導できるように心がけています。

安田 先生が研修医だった頃と今の研修医では、時代と共にタイプも変わってきていると思いますが、今の研修医に日々、どんな姿勢で研修を学んでほしいというアドバイスはありますか。

吉村 僕自身、積極的に質問したり、知識があるデキるタイプの研修医では全くなかったのですが、今、感じるのは、指導医の先生から質問された時、見当違いだったりしても何らかのレスポンスをくれたりとか、自分が何を考えているか伝えてくれたり、分からないなりにでも積極性を是非持ってもらえたらと思います。

安田 先生のご指導を研修医が一番いいと評価させていただいたのですが、今後、こんな指導をしてみたいという目標や夢はありますか。例えば時間が十分にあったとしたらとか。

吉村 そうですね。実際、受診して入院患者が来ましただという場合、研修医の先生に、ある程度考えてみてと言うものの時間もなく、結局自分がやった方が早かったりする部分があります。しかし、研修医の先生の指導にいくら時間をかけてもいいのであれば、考えてもらい、全部終わらせてもらった上でここはこうだね、ということができたら確かにいいかなとは思いますがね。

安田 指導医としてのスタイルとかポリシーはありますか？例えばこれは絶対しないとか、こうあるべきだと思うことはありますか。

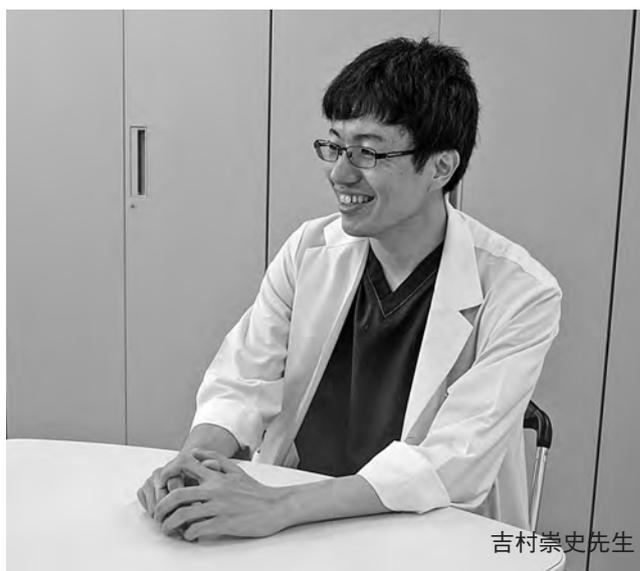
吉村 僕が3年目の時に、屋島総合病院内科の先生に指導医をしていただき、その先生の指導スタイルが「とりあえずやってみる。で、間違っていたら修正する。何かあったら絶対に相談に來い。最終的にケツは絶対にふいてやる」で、本当に大変お世話になりました。その先生の真似というわけではないですが、そんな感じでできたらいいなと思っている部分はあるので、時間はかかるとは思いますが、とりあえず、1回、研修医の先生に全部考えてもらって、最後は責任をとるから、とりあえず自分ひとりの判断でGoする、わからないことがあればなんでも聞きに來てくれというところを、できるだけ伝えるようにしたいと思います。

安田 先生の研修医時代にこんな失敗をしたことがあるとか、どういうふうになんかを乗り越えたなどのエピソードがありましたらお話できる範囲で聞かせて下さい。

吉村 記憶に残っているところというと、麻酔科で厳しい先生に指導していただいた時に、バイタルの調整もちょっとそれ違うと言われたり、緊張しすぎて薬を入れるのにすごく手が震えてしまって手技が上手く出来なかったことがあります。ただそこで終わりではなく、手術が終わってから何がいけなかったのか相談し、しっかりフィードバックしていただきました。



安田真之先生



吉村崇史先生

安田 何年目の話ですか。

吉村 2年目です。

安田 それをちゃんとクリアして、次の時にはできていくのですね。

吉村 そうですね。

安田 客観的にできてなかったところを結び直すというのが大事なのですね。先生からみて今の研修医は先生の時と比べて恵まれているなどと思う点と、もっとここを頑張った方がいいと思う点がありましたらコメントいただきたいと思います。

吉村 恵まれている点というと、僕が研修医の時は今思えば外来がほぼゼロでしたが、今は研修医の先生が総合内科で外来もされているのを見て本当にいいなと思います。選択の仕方も自由度が高くなっていて、先生方の希望に合わせて科を選べるようなカリキュラムはすごくいいと思います。

安田 先生が内分泌代謝を決定されたのは、最終的に研修医のどの時期でしたか？

吉村 2年目の8月、9月まで麻酔と内分泌で迷っていて、最後の最後に内分泌に決めました。

安田 決め手は何でしたか。

吉村 慢性疾患で長くつきあうのと急性期の麻酔は両極端だと思い、将来的に自分がどういった医者になりたいかとあらためて考えると、患者さんと5年、10年と長く付き合っ、話しながら外来で顔を合わせながらやっていけるのがいいなと思い、そこが決め手だったかと思います。

安田 実際振り返ってみてイメージ通りの科で、思った通りのことができていますか？

吉村 そうですね。

安田 研修医も研修をして技術を上げるということと、自分の3年目以降のキャリアと両方考えないといけなないので悩んでいると思いますので、先輩の先生方もみんな悩んでいたというのが彼らにとって自信になると思います。

今の研修医の先生は、専門医とかの仕組みがきちんとできていてその枠組みに乗らないといけないので大変かなと思います。先生の時は、専門医の育成はありましたか。

吉村 そうですね。内科の専門医制度があって、僕が研修医の時も僕らの一個上から新内科専門医制度が始まりました。

安田 制度が変わって整いすぎていくのも研修医にとっては大変なのかなと思います。

もし、先生から卒後臨床研修センターにご要望などあれば是非、教えていただきたいと思います。先生方は研修医や学生の一番近くにいて見て下さっているの、先生が現場で、もっとこういうのがあるといいとか、それを大学や香川県でやってみてほしいとか、何かご提言があれば。

吉村 当直でしょうか。研修医の当直は、2年目は外病院の時がメイン、1年目は救急の時だけで、しかも強制ではなく、選択で自由にやっていただいています。実際には大学の病棟勤務と一緒に始まると思うのですが、当直ということを研修医の間にちょっとでも経験できたらいいのかなと思います。

安田 大学に帰ってきたときは大変でしたか。

吉村 3年目は屋島総合病院でしたが、その時の当直は最初の2～3カ月はかなりしんどかった覚えがあり

ます。どうすればいいのかもあまりよくわかっていなかったです。

安田 屋島で鍛えられてきて大学の当直をしたらなんとなくこんな感じかなと。

吉村 そうですね。

安田 一人で判断しなければいけない時の対応が難しいですね。それも、科ごとのカラーがあったり、外来だと個人の先生ごとのカラーがあったり。しかし研修医の先生もフィットすれば変わるかもしれないですね。「当直」はキーですかね。

大学の強いところは何でしょうか。回診があったり、レポートを書いたり、トレーニングの先生にみてもらう。レポートメモを見てもらうなど。

吉村 専門家が多いので、基礎疾患とか珍しい病気という圧倒的に大学が多いです。

安田 市中は他の先生と相談しやすいことがあると思いますが、大学は相談しにくいですか。

吉村 気を遣いますね。同期とか、知っている先生だと比較的相談しやすいですが、大学の上の方の先生だと僕らは気おくれします。

安田 やはり、同級生が残って、みんなで協力してやるというような人間関係、同窓会のつながりみたいなものがあれば、大学の垣根が少なくてすむかなと思います。大学のいい面もいっぱいありますから。同級生が多いということは大事です。先生も同級生は残っていますか。

吉村 結構います。県内に30人くらいは。

安田 同期の存在とは。

吉村 同期は全然違います。正式にコンサルまでいなくても、ちょっと相談したいこととか、やっぱり聞き易いです。

安田 顔の見える仲間内の関係性は、医療の質を上げるのに、すごく大事ですよ。研修医の先生も今いる仲間を大事にしてほしいですね。多分、一生、続きますからね。

大学のいいところは指導医の数がとても多いし、みなさん、熱心にして下さるので、非常に助かっています。本当に先生方のお蔭でどうにかこうにか回っています。引き続き、宜しくお願いします。本日はありがとうございました。



支部会・懇親会



令和7年1月12日、高松ロイヤルパークホテルにて11期生同窓会が開催されました。前回は平成29年に行われており8年ぶりの開催となります。今回は総勢35名と多くの同窓生が集いお互いの近況や思い出話に花を咲かせました。平成8年（1996年）卒業のため当然ながら全員30年分老化、いや進化し貫禄がついて威風堂々としておられました。私のような一介の開業医からすれば見上げるような偉い方々とお話ができ感激いたしました。セコイ私は実はこの機会に普段わからない医学的なことや複雑な事務手続きについて専門の先生方に質問して回ろうと思っておりましたが楽しくてすぐに酔っばらってメモを見ることも忘れ何の知識も得ることはできませんでした。乾杯のあとやはり司会進行をまかせれば右に出るものがない（極右？）前田敏樹先生による一人ひとりを指名してお話をしてもらうショーが始まりました。私のように受けた痔ろう手術の失敗事件のような低レベルのトークから世界最

先端の研究のお話、それぞれの病院や組織における苦勞話またはオモロイ話、これまでやこれからの生き方に関する哲学的なお話、また御家族の雰囲気や伝わるほのぼのとしたお話まで幅広い世界が皆に伝わるセミナーいや同窓会となりました。不思議なもので小学生や中学生と異なり大学生といえはそこそこの年齢（さらに私は再受験組）になっていたはずですがこのように30年ぶりに会えばやはり大学時代はまだまだ現実を知らない無知で幼く、ある意味純粋な心をもって過ごしていたのだと思われました。また今では当たり前のスマホやインターネットはなく今からみれば原始的な通信手段でよく生活できていたなと思います。試験が終わって夕方に「これから12時間以上寝たんねん」と針時計で7時にセットして1時間後にアラームに起こされ自分に怒ったこともありました。激安コード留守レスの電話機を買って威張っていた私は勉強会の途中によく電話がかかってきて別室で子機でヒソヒソ話を

していたのですが親機のスピーカーから全部話が聞こえていたようでこれも同窓会で暴露され赤面状態となりました。思えば大学に入学して余裕があったのは最初だけで徐々に試験と実習のオンパレードで疲弊しさらに6年生時には卒試と国家試験の勉強をこなし合格後はお互い挨拶をする間もなくでバラバラになり今に至るのです。大学院に進み研究職になる方や研修

医から病院勤務になり開業する方、公務員になり役所勤務をしてる方など進む道は人それぞれ異なりました。しかし同窓会は大学時代を思い出すことによって我々の原点は香川大学（当時は香川医大）にあるということを確認させてくれます。セコイ医学的知識よりも大切な医者同士のつながりを作ってくれたよい同窓会でした。



参加者一覧（アイウエオ順）

朝倉 昇司	川崎 綾子	中川 圭一	藤原 理朗	村田 知美
大郷 剛	佐藤 太彦	成田 和穂	別宮小由理	安田 吉宏
岡崎 薫	佐藤 徹	西野 朝可	前田 敏樹	山上 有紀
岡崎 太郎	佐藤 大雅	野間 貴久	水野 恵介	山本 未生
岡崎美由紀	中井 誠二	早野 雅人	三宅 俊行	和田 志乃
苧坂 直博	永尾 幸	藤本 祐子	宮下 武憲	和田 直人
小野 恵理	中岡健太郎	藤原 聖子	村田 晶子	渡部 浩二



第4回讚樹會関西支部会

支部会長 岡 勝巳

(平成4年卒・7期生)

2月8日ホテルオークラ神戸にて第4回讚樹會関西支部会を開催しました。

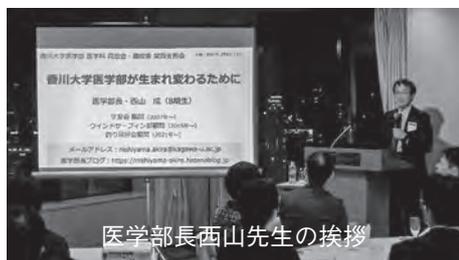
2019年に清元先生が姫路市長になった時にお祝い会も兼ねて関西支部会を開催しようかという話になっていました。清元先生が忙しすぎて予定が立たず、そのうちコロナ禍で・・・その後は気になりながらも実質放置状態になっていました。

去年の春に突然山田先生から関西支部会をやるのでよろしくお願ひします、みたいな連絡がきました。彼は仕事はかなり忙しい身にも関わらずかなり頑張って準備してくれました、ありがとうございます。会場の準備は地元の名士(?)の磯先生にお願いしました。



讚樹會會長星川先生の挨拶

前回の関西支部会は数年前かと思っていたら2004年でなんと20年前で



医学部長西山先生の挨拶

した。この年になると月日の経つのは速いものです。その時の2次会で支部長の磯先生から次回から支部長はお前がやれと言われたのでバスケ部キャプテンから言われると断れるわけもなく「ハイ」と答えた記憶はありました。

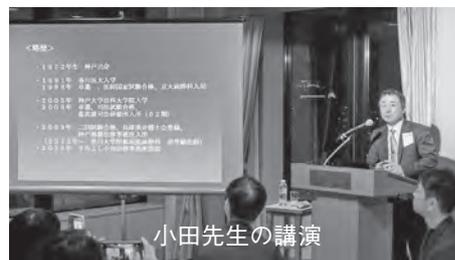


姫路市市長清元先生の挨拶



今西先生の乾杯挨拶

当初Facebookや同窓会報のチラシなどで広報していましたが集まりが悪く、同窓会名簿などで直接声がけをしていくことで参加者は少しずつ増えました。当日は寒い中40名以上に参加



小田先生の講演

していただきました。

12期生のすみよし小田法律事務所の小田裕資先生の講演、西山成学部長、星川広史讚樹會会長に挨拶をしていただきました。本来は4年前に市長就任祝いを兼ねた支部会開催のはずだったので3期生の清元秀泰市長にも一言挨拶をしていただきました。

二期生の今西治先生の乾杯で懇親会が始まりしばらく歓談。

参加者全員に一言ずつ近況報告などをしていただいたところで時間いっぱいになってしまいました。参加

メンバーはやはり卒後10年以上たった先生が多く、みなさん久しぶりの再会で話が弾んでいたようです。逆に卒後間もない若い先生方はあまり久しぶり感もないのでしょうか、参加者が少なく残念でした。次回はもっと参加してもらえるように広く声がけをしようと思います。

名残惜しいとのことでホテルのバーで2次会、20人ほど参加して和やかに楽しみました。

今年度は2026年2月21日に開催する予定にしています。関西の先生方、ぜひご参加ください。



関西支部会参加者一覧 (卒年順)

磯 篤典 (S62) 今西 治 (S62) 谷向 茂厚 (S62) 清元 秀泰 (S63) 前田 晃 (S63) 田中 あゆみ (H元) 明渡 郁子 (H元)
林 栄一 (H元) 高橋 務 (H2) 星川 広史 (H2) 小林 裕之 (H3) 瀬尾 靖 (H3) 奥中美恵子 (H3) 橋本 千穂 (H3)
豊田 裕敬 (H3) 山田 勇 (H3) 岡 勝巳 (H4) 清元 加代 (H4) 植田 孝 (H5) 下野 九理子 (H5) 西山 成 (H5)
弓場 雅夫 (H5) 池畑 恭子 (H6) 富松 拓治 (H6) 人見 浩史 (H8) 田原 憲一 (H9) 原 周子 (H9) 岡田 一幸 (H10)
櫻井 敦 (H10) 藤本 壮之 (H10) 後藤 正司 (H11) 松向寺 孝臣 (H11) 津川 二郎 (H11) 井上 茂亮 (H12)
人見 美鈴 (H13) 金井 理絵 (H14) 金城 和美 (H14) 中谷 和弘 (H14) 高見 充 (H15) 山本 俊介 (H15) 大片 祐一 (H16)
河口 浩介 (H18) 松尾 晃樹 (H25) 酒井 善紀 (H31)

第24回 讃樹會 関東支部会

<日時>

2025年11月15日(土)

受付開始18時

開宴18:30~閉宴21:30

ドレスコードなし

立食+飲み放題(出入自由)

支部会長 岩部 真人 (平成15年卒)

日本医科大学 大学院医学研究科
内分泌代謝・腎臓内科分野 大学院教授

<場所>

boB the garden Ginza

(ボブザガーデンギンザ)

東京都中央区銀座8-9-15

JEWEL BOX GINZA 11F

<会費>

医学生・卒後10年以内は無料！！

お子様も同伴OK！！(無料)

10,000円 (卒後20年以内)

15,000円 (卒後21年以上)

土曜夜の都内開催で、
アクセス抜群です！

昨年度は多くの方にご参加頂き
ありがとうございました。
今年も盛大なご参加をお待ち
しております！！

来たらこたえがみつかります！

懐かし話が新たな縁を作る！

実は凄い 香大医ネットワーク！



日々の環境で悩んだりお困りのことはないでしょうか？
同窓生ネットワークを構築し、活路を見出しませんか？
身近な距離に勤務している同窓生と知り合いになれる貴重な機会です

臨床や経営でのノウハウを相談したい

同窓生にバイトに来て欲しい

香大医つながりでバイトが欲しい

母校の思い出を共有できる仲間が欲しい

研修先・就職先を探している

学位の相談がしたい

専門医取得に悩んでいる

転職・転科したい

などなど

全国各地どこからでも参加大歓迎です！

問い合わせ先：讃樹會事務局

TEL 087-840-2291

sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp

事前参加登録受付中!!

最終締切 10月31日

登録はこちら→





令和7年7月入稿

教室便り

*** 前回から、教室ごとに隔年でお届けしています ***

組織細胞生物学

2025年5月より、味八木が新教授として着任し、江上（講師）、川合（助教）を含む教員3名、技術職員・事務補助員各1名の新体制で、組織細胞生物学教室は新たなスタートを切りました。軟骨・腱・靭帯など運動器組織の再生や病態解明を目標に、組織幹細胞の同定や細胞外小胞（エクソソーム）やAI創薬などを用いた治療戦略の開発に取り組んでいます。国内外の多様な研究機関との連携を活かし、知と人材のネットワークから次世代医学を切り拓いてまいります。また教育面では、基礎医学の魅力とその重要性を伝えるとともに、単なる知識の習得にとどまらず論理的・科学的思考力を育む教育を展開し、「基礎から臨床へ、臨床から基礎へ」を実践できる人材の育成に努めてまいります。

(味八木 記)

分子生理学

分子生理学教室では、令和7年4月に藤村篤史が第4代教授として着任し、現在、教授1名、学内講師1名、事務補佐員1名、大学院生1名の体制で、日々の研究と教育に取り組んでおります。

弊室では、「遺伝子発現の可塑性や細胞の可塑性に着目した病態生理の解明」を研究の柱として、社会導出できる研究シーズを様々なアプローチから育てています。また、第2代教授の徳田雅明名誉教授（現 分子生理学客員研究員）が精力的に取り組んでこられていた希少糖研究も継続しています。学部・大学院教育においては、医学科2年の生理学I、医学科3年の生理学・薬理学実習、臨床心理学科の生理学入門や、大学院の講義・トレーニングなどを担当しています。

現在、大学院生や共同研究先を広く募集しております。香川大学から魅力的なシーズを発信できるよう、教室員一同、日々精進しておりますので、どうぞよろしくご厚意申し上げます。連絡先：physioll-m@kagawa-u.ac.jp（藤村 記）

薬理学

同窓の皆さまにおかれましては、平素より大変お世話になっております。香川大学医学部薬理学講座の現状について報告申し上げます。教室のメンバーは以前にも増して国際色が豊かとなり、教員1名、研究員2名、大学院生10名が外国人です。実験補佐員3名、秘書4名、医学部生数名を加

えた研究体制となっており、教室の人数自体は増えておりますが、香川大学が推進する働き方改革を先導してワークライフバランスを重視しております。また、国際化を最重要課題とし、毎年、米国カリフォルニア大学からの短期留学生に加え、タイ国とブルネイ国から数名の留学生を受け入れており、今年はフィンランドからも医学生が留学予定で、多様性がさらに深まるのではないかと期待しております。

研究活動につきましては、科研費基盤B・挑戦的萌芽研究に加え、AMEDやNEDOなどから大型外部資金のサポートを受けており、治療ワクチンの開発臨床応用に向けたサルでの前臨床試験や遺伝子改変マウス・ラット、さらには肺魚やイルカに至るまでの様々なプロジェクトを展開しております。さらに、2026年度以降に実施予定の国際宇宙ステーションにおける宇宙飛行士での臨床研究に向けて、現在、JAXAやNASAと協議を進めております。

教育活動につきましては、講義の一部を英語で実施しており、学内で初めて垂直講義を泌尿器科と実施しました。また、社会貢献活動としては、市民公開講座や高血圧・腎臓病などの疾患啓発活動、さらには若手研究者に向けたリモート・レクチャーなどを実施しております。以上の薬理学教室の具体的な活動内容につきましては、是非、ホームページをご覧ください（<http://www.kms.ac.jp/%7Eyakuri/>）。常に社会への貢献を念頭に、日々精進して研究・教育を進めて参る所存ですので、引き続き何卒宜しくお願い申し上げます。（西山 記）

医用化学

医用化学教室では、和田教授および栗原助教が、総合生命科学講座・中北慎一准教授の協力のもと、医用化学I・IIをはじめとする医学科開設科目、全学共通教育科目、ならびに大学院科目などの教育に従事しております。

令和5年度に始まった講義棟および実習棟の再開発事業がこのたび完了し、これまで講義棟1階に設置されていた医用化学実験室は、よりコンパクトな形で同棟3階へと移転しました。また、医用化学実習につきましても、実習棟3階の実験室を使用する形に変更されております。

研究面においては、和田教授は引き続き、医薬品合成や水素製造を目的とした新規触媒の開発、ならびに分光イメージング技術の研究に取り組んでおります。一方、栗原助教は、ドラッグデリバリーおよび分子プローブに関する研究を精力的に推進しております。現在は、大学院博士後期課程の学生2名（医学系研究科医学専攻および創発科学

研究科より各1名)とともに、活発な研究活動を展開中です。新装された実験室には、電源・空調・廃棄設備などのインフラが完備されており、非常に快適かつ効率的な研究環境が整えられています。

なお、和田は令和5年10月1日付で、国際戦略・グローバル環境整備担当副学長を拝命いたしました。新型コロナウイルス感染症の影響からの回復が進む中、香川大学から多くの学生が海外の協定校へと渡航する一方、世界各国からの留学生も年々増加しております。キャンパス内の至る所で、多様性に富んだ学生たちが活発に議論を交わす姿が見られるようになりました。近年では、地域への高度外国人材の定着を見据えた取り組みも注目されておりますが、同時に、多文化共生に向けて解決すべき課題も明らかになりつつあります。

医学部の国際交流も、西山医学部長および金西国際交流委員会委員長のご指導のもと、ますます活発化しています。コロナ禍以前より継続されていた国際交流事業もほぼ全面的に再開されつつあり、新たに英国からの交流学生の受け入れが始まるなど、交流の幅がさらに広がっています。また、JICAをはじめとする機関との連携により、さまざまな国から研究者を受け入れる体制も定着し、キャンパスの国際化が一層進展しています。

医用化学教室一同、今後も様々な分野から香川大学医学部を盛り立ててまいります。讃樹會の先生方におかれましては、引き続きご支援・ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。(和田 記)

医用物理学

医用物理学教室では久富が学部教育や研究を進めています。久富は当教室で准教授として着任し15年目を迎えます。まだまだ発展途上で、工夫と努力を重ねているところです。医学部再開発の2期工事が完了し新しくなった講義棟で気分も一新し、以前のようなざわざわした対面講義形式で1年次の医学科学生に物理学の講義を行っています。私自身は物理学を学んだあと医学分野で研究を行ってきており、両方の立場で考えて講義することを心掛け、将来医学を目指す若者に少しでも役に立てばと考えています。

研究面ではPETやSPECTを中心とした医用画像解析を進めています。具体的には画像の定量化、撮像時間の短時間化、撮像法の非侵襲化などを行っています。附属病院の先生方や技師さんにご協力いただき研究を楽しんでいます。最近ではAIを適用し、画像のノイズ除去、定量画像計算の可能性、モダリティ間での画像変換などに挑戦しています。機会があれば他のモダリティでの解析にも着手したいと考えています。

医学部再開発にあたり、教室内の古くなった機器等を一掃し、新たな気持ちで未来に向けて進んでいく所存です。

(久富 記)

炎症病理学

炎症病理学教室では、上野正樹教授の元、千葉陽一准教

授、宮井由美助教と同じく助教の村上龍太の4名で教室を運営しています。本学部名誉教授であり客室研究員の阪本晴彦先生および協力研究員の松本晃一先生にもご助力いただき、また大学院生である若松さんはますます研究に没頭し、成果を上げています。

学部教育では実習を大切に、病理学に興味を持ってもらえるよう努めています。また大学院では臨床講座から多数の医師を受け入れており、現在は小児科・麻酔科・周産期学婦人科学の先生方と共に研究を行っています。近年はAI技術による形態解析を積極的に取り入れ論文として報告し、また臨床の先生方とも共同研究を行っています。病理診断や大学病院での病理解剖およびCPCの実施、地域の病院での診療協力等、診療にも力を入れております。

おかげさまで上野の任期最終年度となりました。皆様方からの温かいご支援のおかげであります。これからも何卒よろしくお願い申し上げます。(村上 記)

衛生学

衛生学教室は准教授・宮武と助教・鈴木の2人で構成しています。今年度は6名の大学院生と共に一緒に楽しく活動しています。宮武先生の温かな指導の下、昨年度は13本の論文が国内外の学術誌に掲載されました。

教室の研究は、メタボ、2型糖尿病、慢性腎臓病の生活習慣改善支援に加え、行政と協同で子どもの生活習慣向上事業や小中学校にネット・睡眠関連の調査をした上で啓蒙活動も行っています。また、大学教育基盤センターと英語学習プログラムの作成に関する研究も行い、サテライトセミナーも積極的に実施しています。

三木町との補助事業である「健やかあすなろプロジェクト」の一環で地域の小中学校と連携しながら不登校児のためのフリースペースを毎週2回開催し、親の会や個人面談を通して保護者の支援もしています。今後も引き続き、教育、研究、社会貢献等を積極的に進めていきたいと思っています。(鈴木 記)

法医学

2024年度より前教授の木下博之先生の後任として、新たに村瀬壮彦が教授に就任いたしました。教室スタッフ(竹居、ジャーナル、長野、山下、田中、川原)は以前と変わらず、法医学実務・研究・教育に取り組んでいます。

香川県でも剖検数が増加傾向となる中、スタッフ一同協力して法医学実務を遂行しています。実習棟の改築に伴い、感染対策となるラミナフローを備えた新しい解剖台を導入していただきました。新型コロナウイルスや結核などを有するご遺体の解剖に際して感染リスクが大幅に低減し、執刀医や介補者がより安全に実務を行うことが可能となりました。

研究に関しては、実務で得られた疑問を研究で明らかにし、その結果を実務に還元することを目標として取り組んでいます。以前より継続されている薬物関連のテーマに加え、

受傷時期推定法（ご遺体に認められた損傷が、生前のどの時期に負ったものなのかを診断する）や、生前のストレス状態をご遺体の組織などから評価する方法といったテーマについて、実験動物・剖検組織を用い探究を行っていきます。

教育面では4年次の法医学系に加え、1年次の早期医学実習や3年次の医科学研究を主に担当しています。社会情勢の変化や死因究明に対する意識の高まりもあり、臨床医においても十分な法医学の知識が求められているため、より学生の興味を引き出すような講義を行ってまいります。

讃樹會の皆様には一層のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒お願い申し上げます。（村瀬 記）

総合生命科学

総合生命科学講座では、教員5名（教授：神鳥、准教授：岩間、中北、吉田、伊藤）が、それぞれが独立にPrincipal Investigatorとして研究活動を進めています。全学共通科目・医学部・大学院における教育活動を行っています。当講座の教員の3名は、研究支援をミッションとした全学組織である研究基盤センターと、その下部施設の運営・管理を、技術職員等とともに担当しています（研究基盤センター長：神鳥、機器共用デジタルラボ担当教員：中北、動物実験施設担当教員：伊藤）。また、神鳥、中北、吉田は、香川大学国際希少糖研究教育機構に所属し、希少糖に関する研究にも従事しています。今後も引き続き、教育、研究、研究支援活動を進めていきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。（神鳥 記）

循環器・腎臓・脳卒中内科学

南野哲男教授が講座を主宰され10年を迎えました。この2年間で循環器グループに1名、腎臓グループに2名の入局がありました。循環器ホットラインや救命救急センターとの連携にて地域医療を支えるとともに、重症心不全患者や難治性ネフローゼ患者に対する高度先進医療を実施し、地域の皆様に高度で最新の医療を提供いたします。重症心不全患者に対する左室補助人工心臓（LVAD）の管理施設、経カテーテル的大動脈弁置換術（TAVI）の実施施設に認定され、さらに特定機能病院としての役割を担っていく所存です。厚労省の事業では、『脳卒中・心臓病等総合支援センターモデル事業』と『慢性腎臓病重症化予防のための診療体制構築及び多職種連携モデル事業』に選定され、脳卒中・心臓病等総合支援センターの設置、職域へのCKD啓発活動など、さらなる地域医療への貢献を目指します。

R5年には第129回内科学会四国地方会を主催させていただきました。今後も、「地域と歩み、ひとを育む」をポリシーとし、香川県の地域医療を支える人材の育成や循環器系救急医療ならびに安心・安全の標準療法の実践を目標に教室員が一丸となって取り組む所存ですので、今後とも讃樹會会員の皆様におかれましては、一層のご支援を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。（祖父江 記）

皮膚科学

大日輝記教授が講座を主宰され6年目となりました。今年度は4名の新入局員を迎え、現在は大日教授以下、助教1名、医員5名で教室を運営しています。藤岡先生が高松赤十字病院に出向し、松井先生が着任いたしました。医局員が増え、さらに明るく活気に満ちた教室となりました。

当科では県内外問わず地域の医療機関と密な連携をとりながら、教室のモットーである全人的皮膚科医療の提供に尽力しています。外来における一般的な皮膚科疾患、脱毛症、巻き爪外来、レーザー外来などの専門分野を含む幅広い診療に加え、局所麻酔下の小手術や全身麻酔下のより高度な手術も行ってまいります。専攻医はもちろんですが、研修医、学生への指導体制、教室内のイベントも大変充実しています。

先生方のお役にたてることがございましたら、どうぞご遠慮なくご紹介いただければと存じます。まだまだ未熟ではございますが、先生方の期待にお応えできますよう教室員一丸となって取り組む所存でございます。今後とも讃樹會の皆様方にはより一層のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。（鈴木 記）

小児科学

日下隆教授が当講座の教授に就任して11年目を迎え、「共に生き、共に喜ぶ」を目標に、子どもたちと共に成長し、人として「成熟する小児科医」の育成を目指しています。

診療においてはアレルギー疾患医療拠点病院事業への貢献や、新規部門として成育消化器病センター（こどもからおとなまで）を開設し、他診療科・他職種連携や移行期医療に取り組んでいます。地域医療においては新生児拡大スクリーニングの対応、瀬戸っ子（糖尿病キャンプ）の援助、医療的ケア児、虐待への対応を行っています。

研究と教育においては新生児黄疸、薬物動態、脳酸素代謝、新生児糖代謝、腸内細菌叢、生活習慣病予防などの研究を行い、各分野で科学研究費助成事業（日本学術振興会）の採択を受け、その成果を国内外の学会で発表しています。学部生、研修医に対しては「四国小児科サマースクール」を主導し、地域小児医療の担い手を育成しています。

また、海外医療への貢献としてアジア各国と連携し学生教育、医療連携に取り組んでいます。

今後とも医局員一同努力して参りますので讃樹會の先生方にはより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。（近藤 記）

小児外科学

小児外科では新生児から成人期に移行した症例まで幅広い年齢の患者さんを診察しています。また、当科の扱う疾患は多岐にわたっており、常に知識をアップデートしながら日々の診療に取り組んでいます。

新生児期に手術を要したお子さんが小学校に入学し、成

長していく姿を見ることができるのは小児医療の醍醐味であり、やりがいを感じるとともに、未来ある子ども達に関わる責任感を感じます。

本年度は原田七海先生（2023年卒）が入局しました。今後の活躍が期待されます。

昨年度より「成育消化器病センター～子どもからおとなまで～」が開設されました。小児外科、小児科、消化器内科の3科が連携して小児の消化管疾患に対して正確かつ最先端の医療を提供すべく取り組んでいく予定です。

関連施設である高松赤十字病院小児外科ともども教員一同、香川県の小児医療の一翼を担うべく努力する所存です。今後とも讃樹會会員のみなさまには一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。（田中 記）

消化器外科学

岡野圭一教授が就任され4年目となる今年の一歩のうれしい出来事は、3人の新しい仲間（天雲先生、守谷先生、矢野先生）が増えたことです。近年、外科医を取り巻く環境が厳しい状況で、特に地方で消化器外科を専門とする医師が減少傾向にあるなか、昨年（2人）に引き続き3人の新入局者を迎えることができたのは、若手が活躍する活気ある当教室の魅力が伝わった結果だと思えます。引き続き魅力ある教室作りに精進してまいります。

当教室は、肝胆膵・食道・直腸などの難治症に対する高難度手術を多く行い、さらには四国唯一の認定施設として脳死下臓器提供による膵移植にも取り組んでいます。一方では低侵襲手術も積極的に行い、日本内視鏡外科学会の認定する技術認定医も食道・大腸・肝臓の各分野にわたり4名在籍、さらに上部・下部消化管・肝胆膵分野でロボット手術も行っており、現在3名がプロクターを取得しています。今後も、後進の指導と共に、高度で安全安心な低侵襲手術を発展させ提供してまいります。

また、昨年9月には第16回日本Acute Care Surgery学会学術集いを当教室が主催し、高松で多くの皆様からご支援をいただきながら盛大に開催することができました。今後も、地域の「最後の砦」としての役割も担いながら、学生や初期研修医に対しては消化器外科の魅力を伝え、若手の外科医に対しては修練の場を提供し、患者さんに対しては安全で安心な手術で応えるよう取り組む所存です。今後とも、讃樹會の会員の皆様におかれましては、一層のご支援を受け賜りますようお願いいたします。（岸野 記）

整形外科

2022年9月1日に着任された石川正和教授による新体制に移行してから3年目を迎えました。当教室では、リサーチマインドを持ったSurgeon Scientistの育成に注力し、臨床・研究・教育に取り組んでいます。

臨床面では、2023年より自家培養軟骨移植術、2024年より股関節鏡視下手術を導入し、関節温存手術の選択肢を広

げています。また、骨粗鬆症外来やがん口コモ外来を開設し、多職種・他科と連携した包括的診療を進めています。

研究面では、新規半月板修復・再生医療や光を用いた新規組織評価技術の開発、悪性骨軟部腫瘍の多施設共同研究、ウェアラブルセンサーによる活動量の計測や、超音波画像装置を用いた半月板の動態観察から患者の術前後の変化と最適ナリハビリテーションプログラム確立を目指した研究などを行っています。

新入局に関しては、2024年に1名、2025年に3名が新たな仲間として加わりました。2024年からInstagramを開設し、在学生に当教室の魅力を伝え、新入局員獲得にも注力しています。

また、今年度は国内留学として、広島大学、早稲田大学にそれぞれ1名の医師を派遣し、教室全体の活性化と更なる飛躍を図っています。

新体制となって3年足らずのまだまだ未熟な状況ですが、臨床・研究・教育いずれにおいても熱意をもって取り組んでおります。今後とも、讃樹會の会員の皆様におかれましては、一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。（森 記）

泌尿器科学

杉元教授が就任されてから8年目となりました。近年は入局者の勧誘に苦勞していましたが、勧誘活動の成果がでたのか来年度は数名の先生が入局を希望されています。今後も香川県の泌尿器科医療を担う医師を確保するため卒業生に声をかけていきたいと思えます。

臨床面では、昨年度に前立腺癌の生検法において、事前に撮影したMRI画像と生検時の超音波画像をリアルタイムに融合させ、癌の疑いのある部位を正確に採取することができるMRI超音波融合画像下前立腺生検法を導入しました。この生検法で癌の局在診断が可能となり、本年6月より癌の部位のみを治療する局所療法としてHIFU（高密度焦点式超音波療法）の機器を導入しました、本治療は先進医療と認可されており西日本で最初の先進医療施設となります。

また、対外的な活動としては、本年5月に第22回泌尿器科試験再生研究会を高松で主催し、全国から100名を超える参加がありました。また、12月には日本泌尿器腫瘍学会を主催予定で現在準備を進めております。

当科では引き続き杉元教授のリーダーシップのもと精進していきたいと思えますので今後ともよろしくお願い申し上げます。（岡添 記）

眼科学

2018年に鈴間潔教授が着任され、今年で8年目に突入します。間でコロナ禍もあり、足踏み状態だった時期もありましたが、ようやく教室も安定期に入ってきたように思います。網膜・硝子体外来、黄斑外来、緑内障外来、眼循環外来、斜視・弱視外来、涙道外来の専門外来を中心とした

体制で、一同日々診療・研究・教育にあたっております。

一昨年はなんと4名（香川大眼科史上2番目の多さ）、今年は2名の入局がありました。一昨年の4名は1年間しっかり大学での眼科診療を学んだ後、今年からそれぞれ連携施設へ修行に出、今年入った2名は現在大学で日々一生懸命研修しており、硝子体注射など徐々にいろいろな手技を修得していております。皆それぞれ頼もしい限りで、立派な眼科医となれるよう頑張っていると思います。眼科専門医は一昨年は2名、今年は4名が取得致しました。また、2年前から神戸理研に国内留学していた中野先生がロボット研究開発の成果をあげて4月から大学に戻ってきています。後任として今は秋光先生が国内留学中です。

今後とも眼科学教室をよろしくお願い申し上げます。

（山下 記）

放射線医学

西山佳宏教授となり、今年度で18年目となりました。

昨年4月に新入医局員（後期研修医）として、川西 隆史先生、大和 徳幸先生の2名が入局され、若い力が充実してきております。また昨年10月に戸上 太郎先生が坂出市立病院に、藤本 憲吾先生が香川労災病院に赴任、今年6月に木村 成秀先生が小豆島中央病院に赴任しました。

若手から中堅の先生も順調に成長し、今上 雅史先生が昨年度「放射線診断専門医」を無事取得し、活躍されています。

当科では今までも行われていた甲状腺癌術後や転移などへのヨウ素内療法と、去勢抵抗性前立腺癌骨転移治療薬による²²³Ra療法に加え、ソマトスタチン受容体陽性の神経内分泌腫瘍に対する治療薬のルテチウムオキソドトロチド（ルタテラ[®]）による治療も開始しております。このような核医学治療に関しては放射線診断科医師のみではなく関係診療科の医師をはじめ放射線部・病棟の看護師や診療放射線技師が合同チームとして連携して行っております。

これからも当科では、画像診断、血管内治療、核医学治療を通じて「患者さんに寄り添う放射線診断や治療」及び「放射線診断へ様々なアプローチによる探求」を行っていきたいと思っております。

（室田 記）

救急災害医学講座

2025年4月から救命救急センター（救急災害医学講座）は2nd stageを迎えました。初代黒田泰弘先生が退官され、河北賢哉教授が新救命救急センターを指揮することになりました。それと同時に平場優介先生が我々の教室に入局してくれました。また、自治医科大学から石橋尚弥先生、聖路加国際病院から関口萌先生が専攻医の短期研修として神経集中治療を学びに来ていただきましたが、お二人とも、我々の教室での残留が決定しました。スタッフが少ない中で、このような形で若い仲間が加わってくれることは非常にありがたいことです。また、脳神経外科、内科系診療科からも定期的に人的派遣を継続していただき香川県救急医療の最後の砦としての役割を果たし

ております。教育現場では医学部生の中に救急医療に興味を持っている学生が意外と多いことに気付かされます。彼らの夢を壊さないように、全力で教育を行い、香川の救急医療を支えてくれる専門医を育成していきます。まだまだ始まったばかりの小さい教室ですが、今後は伸びしろしかないと思っております。讃樹会の先生方におかれましては、引き続きのご支援、ご指導の程、よろしくお願いいたします。

（山口 記）

総合診療学

総合診療学では香川県の若手・中堅の総合診療専門医を育成すべく、4人のスタッフが診療・教育を行っています。診療の対象は、発熱、全身倦怠感、関節痛や体重減少などすぐには診断がつかない患者さんです。大学病院は専門医の集団ですが、総合診療的なアプローチで診療にあたり、必要に応じて専門診療科に継続診療をお願いしております。

2018年から19番目の専門医として「総合診療専門医」制度が始まり、本教室でもプログラムを開始し今年度より2名の専攻医を受け入れています。また厚生労働省の事業の採択により「かがわ総合診療医センター」を設立し、香川県内における若手の総合診療医育成だけでなく中堅医師のリスキリングプログラムを準備する予定です。また、各スタッフの専門に基づいた研究を行い、研究指導・学会発表や論文執筆も進めています。

香川の総合診療の発展と地域医療への貢献に寄与できるよう、スタッフ一同尽力して参りますので今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

（市来 記）

医療情報学

前回に続いて、医療DXの話をしていきます。国が行っている電子処方箋ですが、（2025年6月現在）医療機関での運用開始率は20%未満であるものの、薬局では80%を越える状況です。いよいよこのシステムが本格的に動くことになると思いますので、未対応の先生方もそろそろ検討をされてはと思います。同じく国の電子カルテ情報共有サービスは、電子カルテのデータを新しい標準規格であるHL7 FHIR（エイチエルセブン・ファイアと読みます）に合わせて共有することを計画されています。電子カルテをご使用の先生はこの規格に合わせるためのバージョンアップが必要になる場合がありますので、お気を付けください。

それから、多くの先生が期待をされているであろう、生成系AIによる退院時サマリーの作成については、ここしばらく一気に導入が進んでいます。費用対効果は使い次第かな、と思っております。

なお、本年度から3年間、私は日本医療情報学会の代表理事を仰せつかることとなりました。香川医大時代に初代医療情報部長の酒井先生（耳鼻科教授）に師事して以来の、私の医療情報に関する研究活動の集大成とすべく、性根を据えて頑張ろうと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

（横井 記）

現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。ご連絡は、讚樹會HP、メール、FAX、郵送いずれでも結構です。



香川大学医学部医学科同窓会讚樹會行き

(TEL・FAX 087-840-2291)

スマホはこちら

会員情報変更届

記入日 年 月 日

卒業年	S・H・R・院 年	希望送付先	勤務先・現住所・実家
該当するものに○をお付けください	開業医 / 産業医 / 勤務医 / 研修医 / 在校生 その他 ()		
ふりがな			
氏名 (旧姓・旧名)	()		
現住所	〒		
	公開 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/>	TEL	FAX
	E-mail		
勤務先	名称	部署	
		役職	
	〒		
公開 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/>	TEL	FAX	
E-mail			
恒久的住所 (実家)	(氏名・続柄) 〒		
公開 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/>	TEL	FAX	
連絡事項及びメッセージ 			

切り取り線

※公開の可・不可にチェック を入れて下さい。

(事務局記入) 処理日 年 月 日

編集後記

蝉の声が遠ざかり、秋の気配が風に混じり始める季節となりました。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

最近、村上春樹さんの『職業としての小説家』を読み返していました。「毎日机に向かって文章を書くということは、深い井戸を掘るような作業だ」という一節に、医療もまた、同じような営みなのではないかと思いを馳せました。日々の診察、治療、研究は、患者さんの健康という深い井戸を掘り続ける作業に似ています。また「継続することに意味がある」と語っています。私たちの医療への取り組みもまた、その日その日の積み重ねに真の価値があるのだと思います。

さて、本号では人事の大きな変化が印象的でした。新任教授の先生方のご挨拶からは、新しい風と共に母校に注がれる情熱を感じることができました。一方で、長年にわたり医学部の発展にご尽力いただいた先生方の退任のご挨拶は、村上さんの『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』を思い起こさせます。人生の節目において振り返る歳月は、決して「色彩を持たない」ものではなく、医学教育や研究に注がれた情熱という鮮やかな色彩に満ちていることを改めて実感しました。

神戸で開催された関西支部会の報告では、久しぶりに再会した同期生たちの交流の様子が生き生きと描かれ、村上さんがよく描く「失われたものを探し続ける」物語のように、私たちの心の中にある大切な何かを再発見させてくれたのではないかと思います。コロナ禍を経て、改めて人とのつながりの大切さを実感し、讃樹會の意義も、これまで以上に深く感じられるようになったのではないのでしょうか。「人は一人では生きていけない」と様々な作品で表現していますが、同窓生という絆で結ばれた私たちもまた、お互いを支え合いながら、それぞれの道を歩んでいるのだと思います。

最後に、ご多忙の中、貴重な原稿をお寄せくださいました皆様、そして讃樹會の運営にご尽力いただいている皆様に心より感謝申し上げます。これからも、より多くの同窓生の皆様に愛される会報作りに努めてまいります。何かご意見、ご提案がございましたら、お気軽にお声をおかけください。

広報局長 谷 丈二（平成14年卒・17期生）

事務局からの
お知らせ

〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1 TEL 087-840-2291
E-mail sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp HP <https://dousoukai.site/sanjukai/>
讃樹會公式Facebook <https://www.facebook.com/sanjukai>

◇医学部祭開催日程

令和7年10月10日～10月12日

(10月12日にはホームカミング・ディを実施します。)

◇医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています。
詳細は事務局にお問合せ下さい。資料をお送りします。

◇助成金公募のお知らせ：

詳細は、讃樹會HPの「要項・ダウンロード」を参照下さい。

◆国外留学助成金公募

2025年度第2回国外留学助成金 2025年9月末日締切

2026年度第1回国外留学助成金 2026年3月末日締切

◆学会助成金公募 開催前年6月末日までに申請下さい。

◆準会員（医学科在校生）対象の助成金

「学生の国際交流助成」公募（留学から帰国後1ヶ月以内に申請）

「競争的資金」（自主的な活動への支援）公募（申請締切はHPを確認して下さい。）

◇変更連絡：現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。
ご連絡方法は、讃樹會HPから入力、メール、変更届用紙をFAX、郵送いずれでも結構です。

訃報

名誉会員 安部陽一先生 2025年5月

正会員 田中 翔先生 2025年2月

(平成30年卒・33期生)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



疾病の『予防』・『早期発見』・『治療』を目指す!

丸亀町クリニック

〒760-0029 高松市丸亀町1番地1 丸亀町壱番街西館3F

TEL: 087-802-6360 URL: <https://www.marucl.jp/>

休診日: 水曜・日曜・祝祭日 院長: 豊永 慎二



私たちと想いを共有していただける、ドクターを求めています

当クリニックは、丸亀町の開発の一環として、商店街からの
様々な協力をいただきながら、2019年1月に開業しました。

地域に密着した、街のクリニックを目指しています

働きやすい環境づくりに取り組んでいます



SDGS

丸亀町商店街の開発目標は「持続可能な町」の創造です

丸亀町は高松の中心地に、たくさんの人々が快適に過ごせる

安心安全な「医・食・住」の整備を進めており、

当クリニックは、その一環である「医」を担っています。